福岡市埋蔵文化財調査報告書第1104集

草場古墳群2

―　第2次調査報告　―

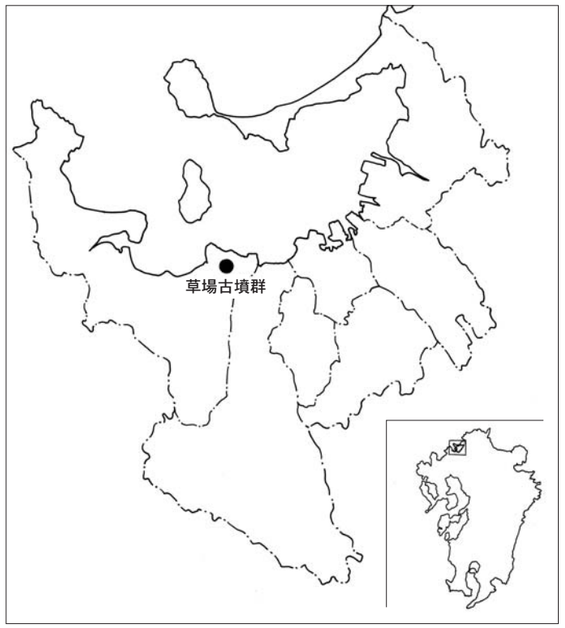
2010

福岡市教育委員会

草場古墳群2 ―第2次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一〇四集
2010
福岡市教育委員会

草場（くさば）古墳群 2

— 第2次調査報告 —



遺跡略号　KSK-1
調査番号　7320

2010

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの交流が盛んに行われ、その結果として、今日の国際感覚に優れた都市として発展してきました。また市内には多くの遺跡が残され、これらを保護し後世に伝えることは私どもの勤めであります。

今回報告する草場古墳群を調査したのは30数年前のことであります。当時は調査地点から早良平野を見渡せば、古くからの集落が点在し、その周辺は水田に囲まれた長閑な農村風景が広がり、とくに室見川の西側には団地や新興住宅地もなく、豊かな自然と史跡に囲まれた地域でした。

昭和40年代は開発が盛んで文化課は多くの調査物件を抱え、十分に対応することが出来ない状況で、大学の先生方に発掘調査を依頼していました。草場古墳の調査もその中の一つで、東京国立博物館を退官されていた三木文雄先生に依頼して調査したものです。

調査の結果、方墳１基、円墳３基を確認しました。１号墳は墳丘裾に列石を廻らし、羨道の両脇の墳丘に祭祀遺構があり、坏、壷、甕などの多くの須恵器が出土し、重要な遺跡であることが確認されました。遺跡の重要性に鑑み、現状保存するように三木先生が要望され、開発事業者と協議し保存されることになりました。平成４年、福岡市指定史跡として、市民に開放しています。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが亡くなられた三木先生をはじめ福岡県文化課、九州大学の先生方、地産株式会社、竹中土木株式会社、地元の方々等の調査に協力された人々に深く感謝いたします。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が故三木文雄先生に依頼して結成した「草場古墳群調査団」が団地造成工事に伴い、西区下山門において発掘調査を実施した草場古墳群第２次調査の報告書である。
2．本書は地産株式会社と草場古墳群調査団の間に取り交わされた委託契約に基づき調査団が整理・報告を実施する計画であった。整理の途中で三木先生が亡くなられる等の諸般の事情により整理及び報告書作成することが困難になった。よって福岡市教育委員会埋蔵文化財第２課が国庫補助事業としてその後の整理・報告を行ったものである。
3．本書で用いた方位は磁北である。
4．本書で使用した遺構実測図は主に轟・中岡・藤井が行い、その他は調査員及び調査参加学生等による。3、4号墳の石室実測図は昭和49年２月、藤井により作成された。
5．本書に使用した遺物実測図及び製図は濱石正子・撫養久美子による。
6．本書に使用した遺構写真は三木、轟、遺物写真は松村が撮影した。
7．本書の編集・執筆は松村が行った。
8．本書に使用した記録・遺物類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
9．本書に使用した標高は調査時点で事実誤認があったようで相当違っていた。故に、当時の地形測量図と第３次調査の地形図等を参考に補正し、当時の実測原図の数値から４m減じた値を記している。
10. 本書に掲載した遺物は土器類だけであるが、そのほかに鉄鏃・金環・ガラス玉類が出土しているが数回の移動中に行方が不明となった。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．調査経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
Ⅲ　調査の記録
　1．調査概要 …… 6
　2．１号墳の調査 …… 6
　　石室 …… 9
　　祭祀遺構 …… 10
　　列石 …… 13
　　出土遺物 …… 13
　3．２号墳の調査 …… 21
　　石室 …… 21
　　墳丘 …… 21
　　出土遺物 …… 21
　4．３号墳の調査 …… 22
　　石室 …… 22
　　石棺 …… 24
　　出土遺物 …… 26
　5．４号墳の調査 …… 26
　　石室 …… 27
　6．3・4 号墳の墳丘 …… 27

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 3
Fig. 2　調査区位置図（1/2,000）「草場古墳群第3次調査報告」より …… 5
Fig. 3　草場古墳群地形測量図（1/300） …… 7
Fig. 4　1号墳石室実測図（1/50） …… 8
Fig. 5　1号墳墳丘土層実測図（1/50） …… 9
Fig. 6　羨道部土層実測図（1/40） …… 10
Fig. 7　列石及び遺物出土状況実測図（1/30, 1/100） …… 11
Fig. 8　1号墳出土土器実測図（1）（1/3） …… 12
Fig. 9　1号墳出土土器実測図（2）（1/3） …… 14
Fig.10　1号墳出土土器実測図（3）（1/3） …… 15

Fig.11　1号墳出土土器実測図（4）（1/3）…… 16
Fig.12　1号墳出土土器実測図（5）（1/3）…… 17
Fig.13　1号墳出土土器実測図（6）（1/6）…… 18
Fig.14　1号墳出土土器実測図（7）（1/8）…… 19
Fig.15　1号墳出土土器実測図（8）（1/8）…… 20
Fig.16　2号墳石室実測図（1/50）…… 21
Fig.17　2号墳出土土器実測図（1/3）…… 22
Fig.18　3号墳石室実測図（1/50）…… 23
Fig.19　甕出土状況実測図（1/10）…… 24
Fig.20　3号墳石棺実測図（1/20）…… 24
Fig.21　3号墳出土土器実測図（1/3, 1/6）…… 25
Fig.22　3号墳石室実測図（1/50）…… 27
Fig.23　3, 4 号墳トレンチ土層実測図（1）（1/40）…… 28
Fig.24　3, 4 号墳トレンチ土層実測図（2）（1/40）…… 30
Fig.25　3, 4 号墳トレンチ配置・遺構図実測図　（1/150）…… 31

図　版　目　次

PL. 1　（上）古墳遠景（東より）
（中）1・2号墳調査前全景（東より）
（下）3・4号墳調査前全景（東より）
PL. 2　（上）1号墳羨道部（南より）
（下）1号墳玄門（南より）
PL. 3　（上）1号墳左側壁（東より）
（下）1号墳東側列石（南より）
PL. 4　（上）1号墳東祭祀土器出土状況（南より）
（中）1号墳東祭祀土器出土状況（南より）
（下）1号墳西祭祀土器出土状況（南より）
PL. 5　（上）1号墳西側墳丘（南より）
（下）2号墳石室全景（南東より）
PL. 6　（上）2号墳石室全景（南東より）
（中）2号墳石室全景（北西より）
（下）3号墳遺物出土状況（東より）
PL. 7　（上）3号墳羨道部（南東より）
（中）3号墳左側壁（南西より）
（下）3号墳石棺（南西より）
PL. 8　（上）3号墳祭祀土器出土状況（北西より）
（中）4号墳石室調査状況（南東より）
（下）4号墳石室調査状況（東より）
PL. 9　1号墳出土土器
PL.10　1～3号墳出土土器
PL.11　1号墳出土土器
PL.12　1号墳出土土器
PL.13　1号墳出土土器
PL.14　1～3号墳出土土器

はじめに

1．調査に至る経過

当該地は当時の地権者早良鉱業株式会社から昭和47年に事前開発願いが提出され、それに伴い福岡市教育委員会は調査団を結成し、調査に着手した。申請地は樹木に覆われ鬱蒼としていたので、その伐採に手間取り発掘調査を開始する前に調査費用が不足する事態に陥った。以後原因者早良鉱業と教育委員会が話し合いを重ねたが協議が整わなかったので一旦は調査を中断した。（第1次調査）

翌昭和48年、新に開発主体者となった地産株式会社から事前開発願いが提出され、発掘調査に関する協議が行はれた。文化課では多くの調査案件を抱え、直ちに調査に着手することは困難であることから、文化課文化財主事三島格氏の尽力により東京国立博物館を退官され、聖心女子大学などで教鞭を執っていた三木文雄氏を調査団長とする新たな組織が結成され、夏休みを活用して調査を再開することとなった。（第2次調査）

2．調査の組織

（発掘調査）

調 査 団 長　三木 文雄（元東京国立博物館）
調　査　員　轟 俊二郎　　茂木 雅博
調査参加者　中岡和浩（東海大学学生）　聖心女子大学学生　共立女子大学学生
東京学芸大学学生
福岡市教育委員会文化課　課長　清水 義彦　　文化財主事　三島 格
文化財係長　三宅 安吉
事務担当　岩下 卓二　　調査員　松村 道博
（肩書きなどは調査当時のものである）
調査委託者　地産株式会社

（整理調査）

整 理 総 括　福岡市教育委員会　埋蔵文化財第2課　課長　田中 寿夫
調査第1係長　杉山 富雄
庶　　務　福岡市教育委員会　文化財整備課
整 理 担 当　福岡市教育委員会　埋蔵文化財第2課　主任文化財主事　松村 道博
整 理 補 助　福岡市教育委員会　埋蔵文化財課 技能員　濱石 正子　　撫養 久美子

3．調査経過

昭和48年（抄録）

7月26日　前年に伐採を終えていたので、その後に繁茂した下草の除草作業から調査を開始。
7月28日　除草作業及び1/50現況地形測量図作成。
7月29日　発掘作業開始。1号墳は北側を病院職員寮建設の地下げで約3ｍの崖面になり、石室は東西方向に輪切りされていた。石室内を掘り下げ、内部に天井石が落下している状況を確認する。
7月31日　1号墳の頂上から墳丘に東西方向にトレンチを入れる。頂より西側で須恵器が纏って出土。

8月１日　１号墳の天井石を清掃、写真撮影。２号墳中央にトレンチ設定。西側で提瓶、坏が出土し、後に小石室を確認。３号墳は石室が一部開口していたので室内を掘り下げ、鉄斧、刀子、鉇が出土した。

8月２日　１号墳は落下していた天井石を取り除くと北側に開口していると考えていたのが、逆に南側に羨道を確認

8月４日　１号墳の羨道両側を拡張すると墳丘から葺き石と供献土器が出現。西側の土器群は上下層に分離でき、二時期のものか。

8月13日　１号墳の東側墳丘で4、5個体分の須恵器出土。２トレンチで墳丘裾を確認。

8月24日　3、4号墳のくびれ部にトレンチを設定。２つの古墳を分離する溝状遺構はなく、同一古墳と思える地山整形を検出。双円墳あるいは前方後円墳の可能性が強まる。

8月25日　作業遅延の現状と今後の調査について文化課と協議し次のような結論を得た。
①調査期間は一応、当初契約の９月10日までとする。②残った作業は時期を見て再開する。③3、4号墳が前方後円墳なら保存を働きかける。④保存のためにも両古墳の墳端をおさえる。⑤１号墳は全掘するが、3、4墳は完掘できない。

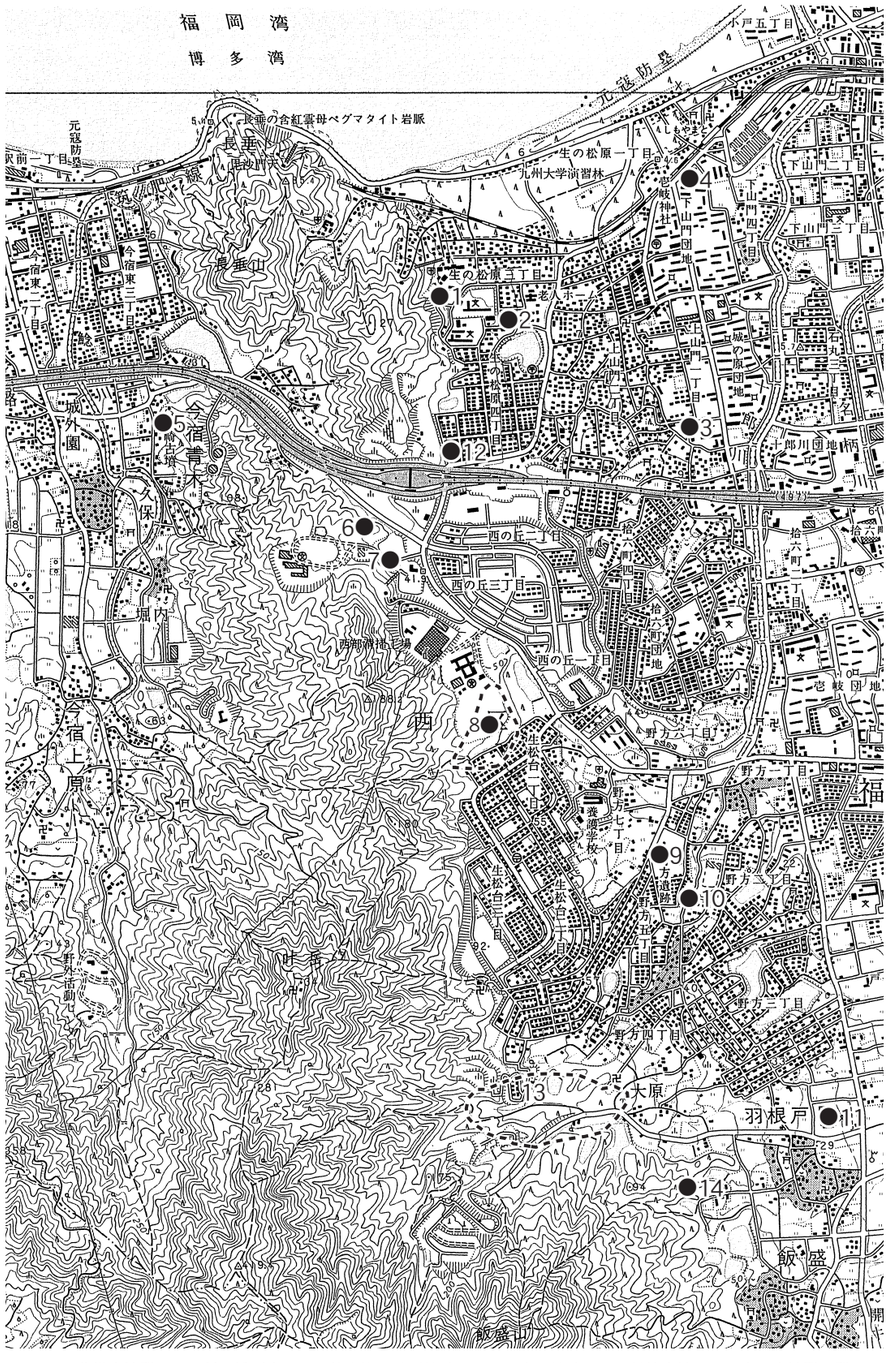
8月26日～９月15日　１号墳は羨道の両側に葺石がめぐり、墳丘中腹に祭祀の須恵器群を検出する。墳丘及び石室の実側を開始する。3、4号墳の墳丘裾にトレンチを設定し掘削する。Ｊトレ南端より2.4ｍの地点で溝が消滅。わずかな隙間を残して墳端は下方へ落ち、５トレに続くことを確認。４号墳が前方部らしき形態をとっていることは確か。

９月26日　１号墳大甕取り上げ。内部に大石３個が投入されていた。Ｅ６の中にも滑石、拳大以上の石数個があり、このため口縁部が割れその破片が内部に落ち込んでいる。

10月１日　機材撤収して調査を終える。文化課など関係先にご挨拶に伺う。

※この調査経過は三木先生、轟氏の調査日誌を元にまとめたものであるが文責は松村にある。また、福岡県文化課 児玉真一氏、福岡市文化課　島津義明、山崎純男氏には種々お世話になった事が記されている。なおこの草場古墳４基は学校用地として福岡市教育委員会が買収し、平成４年３月福岡市指定史跡として斜ヶ浦瓦窯跡と伴に現地保存されている。

調査番号	７３２０	遺跡略号	ＫＳＫ－２
調査地地籍	福岡市西区下山門１７０９	調査面積	古墳４基
調査期間	昭和48年７月27日～昭和48年10月１日		



1．草場古墳群　2．斜ヶ浦瓦窯　3．拾六町ツイジ遺跡　4．下山門遺跡　5．鋤崎古墳　6．広石古墳群Ａ群
7．広石古墳群Ｂ群　8．広石古墳群Ⅰ～Ⅶ群　9．野方中原遺跡　10．野方久保遺跡　11．羽根戸原Ｃ遺跡
12．草刈古墳群　13．羽根戸古墳群Ａ～Ｐ群　14．羽根戸南古墳群

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅱ．遺跡の立地と環境

早良平野の南には背振山系から展開する山塊が横たわり、筑前と肥前とを分断している。背振山系の一つ金山（967m）から派生した丘陵は北へと続き飯盛山、叶岳等の丘陵を形成し、さらに海岸部まで長垂山が延び早良平野と今宿平野とを分ける低丘陵となる。

早良平野での埋蔵文化財調査は数多くなされ、歴史的環境について各々の報告書で詳細に詳述されているので、ここでは室見川下流域西側の状況について簡略に記す。叶岳等からのびる低丘陵や早良平野の西側裾部あるいは洪積台地には旧石器時代から数多くの遺跡が分布している。吉武遺跡群や羽根戸遺跡ではナイフ形石器、細石器が出土している。縄文時代早期、前期の遺跡では微高地に立地する松木田遺跡が上げられる。炉や集石遺構、土坑などが検出され、撚糸文土器や石鏃などが遺構に伴って多量に出土し、この時期の良好な遺跡である。丘陵中腹や尾根上に占地する広石古墳群や笠間谷古墳群などの調査に伴って押型文土器が出土している遺跡が多く認められる。これらは遺構に伴うことは無く、出土も少量といった特徴が認められる。前期は沖積地の四箇遺跡や田村遺跡などから土坑が確認され、轟Ｂ式土器や曽畑式が出土している。中期には田村遺跡や四箇遺跡22次調査地点から瀬戸内系等の土器が見られその交流が伺われる。中・後期には吉武遺跡群で46基の貯蔵穴が調査されている。底から植物種子が出土しているドングリピットがある。有田遺跡では60基の貯蔵穴（土坑）が確認されたが、洪積台地に占地することから有機物は検出されていない。四箇遺跡Ａ地点では後期の埋甕があり、包含層からは西平式・三万田式土器と多数の石器が共伴している。

縄文晩期の突帯文土器期から弥生前期にかけての遺跡は沖積地、微高地、洪積台地に展開する。有田遺跡では台地頂部にＶ字状環濠が確認され、台地縁に位置する有田七田前遺跡では集落から投棄したと考えられる包含層から半島系の土器が出土している。石丸古川Ｂ遺跡では低湿地の微高地上に集落が営まれ、拾六町ツイジ遺跡、四箇遺跡などでも大陸系石器、木製農耕具あるいは矢板列など水田稲作農耕に関連する遺構・遺物が見られる。後期にはさらに遺跡は拡大し有田遺跡や原遺跡では住居址、甕棺墓が確認されている。低地の下山門敷町遺跡、砂丘上の姪浜遺跡にも集落が営まれている。吉武高木遺跡は弥生時代から古墳時代各期の拠点集落があり甕棺墓は1000基以上が出土し、区画墓や墳丘墓から青銅器類も多数出土している。終末期から古墳前期にかけて大規模な遺跡が調査されている。野方中原遺跡では住居址が幾重にも重複する環濠集落が確認され、石棺からは後漢鏡が出土している。南東に位置する野方久保遺跡では約70基の古墳時代前期の住居跡が調査され、人口増加が窺われる。古墳中期には吉武遺跡や西新町遺跡、有田遺跡から陶質土器や半島系土器が数多く出土し注目される。湯納遺跡・拾六町ツイジ遺跡からは木製農耕具や建築材、臼・容器等が出土している。墳墓では砂丘に立地する藤崎遺跡の方形周溝墓から三角縁神獣鏡、五島山古墳からは神獣鏡・銅鏃が出土している。吉武遺跡には中期の帆立貝式の葺石・円筒埴輪を巡らす樋渡古墳や方墳、後期の円墳も20数基見られる。金武・羽根戸・野方地域の西側丘陵部には中期から終末にかけての群集墳が多数分布している。これらの古墳からは鉄滓を供献する例が多く見られ、広石南古墳群Ａ群のように鍛冶工具を副葬する例もあり製鉄工人との関連が窺われる。福岡市域内では珍しい装飾古墳もある。浦江１号墳、吉武Ｋ7号墳で奥壁に渦巻き文を描いている。

古代の遺跡では早良郡衙に比定される有田遺跡、公的施設等が推定される吉武遺跡などがあるが近くでは南東300mに斜ヶ浦瓦窯跡がある。「伊貴作瓦」「警固」などの文字瓦が見られ、鴻臚館に使用されたとされる。東800mには城ノ原廃寺があるが詳細は不明である。

Fig. 2　調査区位置図（1/2,000）

Ⅲ．調査の記録

１．調査概要

本古墳群は長垂山から伸びる丘陵の尾根線上や裾部に位置する群集墳である。昭和48年の第２次調査当時には西側丘陵に樹木が生い茂り内部を踏査することは出来なく、尾根線上の４基と西裾部の１基、計５基の古墳群と考えられていた。昭和64年の第３次調査で西側丘陵、谷部から新たに古墳が発見され12基の古墳群となった。

古墳は南側から北へ延びる丘陵頂部上にほぼ等間隔に並び、北から南に１号墳～４号墳となる。４号墳の南側は削平され、標高30.0ｍで平坦となっている。北側は病院施設建設で先端部が切断され垂直な崖面となる。

調査は墳丘が切断され石室も輪切りされていた１号墳から着手した。丘陵の先端部にあり、標高23mの位置にある。南に開口する横穴式石室の方墳で、羨道の一部を除いて天井石も崩落し、羨道両側には列石・葺石が見られた。南東部は丁寧で、南西部は疎らな状況を示す。羨道の両側墳端はほぼ真直ぐ伸び南西部、南東部で直角に折れ東西16.7ｍの方墳と推定される。羨道の両側には甕、壷、坏類等が置かれ、墳丘祭祀が行はれている。墳丘の全体の規模は明らかでないが、確認できた範囲で東西16.7mを測り、南北も同規模と推測される。

２号墳は歪な長楕円形の地形を示すが封土は確認できなかった。両側に1、3号墳が築造され、円墳状を呈したもので見かけより小規模な古墳であろう。頂部に設定したトレンチで横穴式石室の腰石を確認したもので、墳丘の全面調査はしていない。トレンチでは表土の直下は地山が現れること、盛り土はすべて欠失しているので大きく削平されていることは確実であるが、古墳を廻る周溝や地山整形などもトレンチ内では確認できなく、その規模を明らかにすることはできなかった。

3、4号墳は南北に並立し、２基の円墳とも考えられる古墳である。しかし両古墳を別ける馬蹄形溝等の施設はなく、西側の地山整形、東裾の細い溝、３号墳の北側の墳丘裾が丸く半円状を描くことなどから同一古墳と判断することも可能で双円墳か否か明らかではないが、その可能性がある古墳である。しかし、両古墳の墳頂部の高さが２m以上あるなど不自然な点もある。３号墳は調査時にすでに西側に一部開口していた横穴式石室である。天井石が遺存し、玄室内には土砂の流入は少なく、空洞となっていたことから副葬遺物は土器、鉄鏃、金環、ガラス玉等がわずかに出土したにすぎない。羨道の南西裾部近くから転石を用いた石棺1基を確認した。石棺内部からの副葬遺物は認められない。４号墳の調査も古墳の墳形を確認するだけのトレンチ調査に留めた。第１次調査では石室平面図の作成だけを行っていたが、調査期間中は時間的余裕がなかったので翌年に実測作業を実施した。長方形の玄室で西に開口する円墳である。墳頂部の３号墳との比高差は現状で１ｍを測るが、４号墳は墳頂部が削平されているので本来は３ｍ前後の差があったものと思われる。

２．１号墳の調査

今回の調査で唯一石室と墳丘の調査を実施した古墳である。ただ墳丘、前庭部の一部の調査は行っていない。古墳は北側へ延びる丘陵の尾根線の先端に位置し、標高23mを測る。北側は病院施設建設により土取りされ石室が輪切りされた状態で露出し、恐らく墳丘の半分以上が削平されているもので、主体部は主軸を尾根線と同じ北北東にとる、両袖式の横穴式石室である。この古墳群の中で唯一南側の尾根の高い方へ開口する古墳である。石室の遺存状況は悪く天井石は羨道部に２石が残るのみで、玄室天井石から奥壁にかけて取り除かれている。石室内は天井石、壁石などの崩落した石材で埋

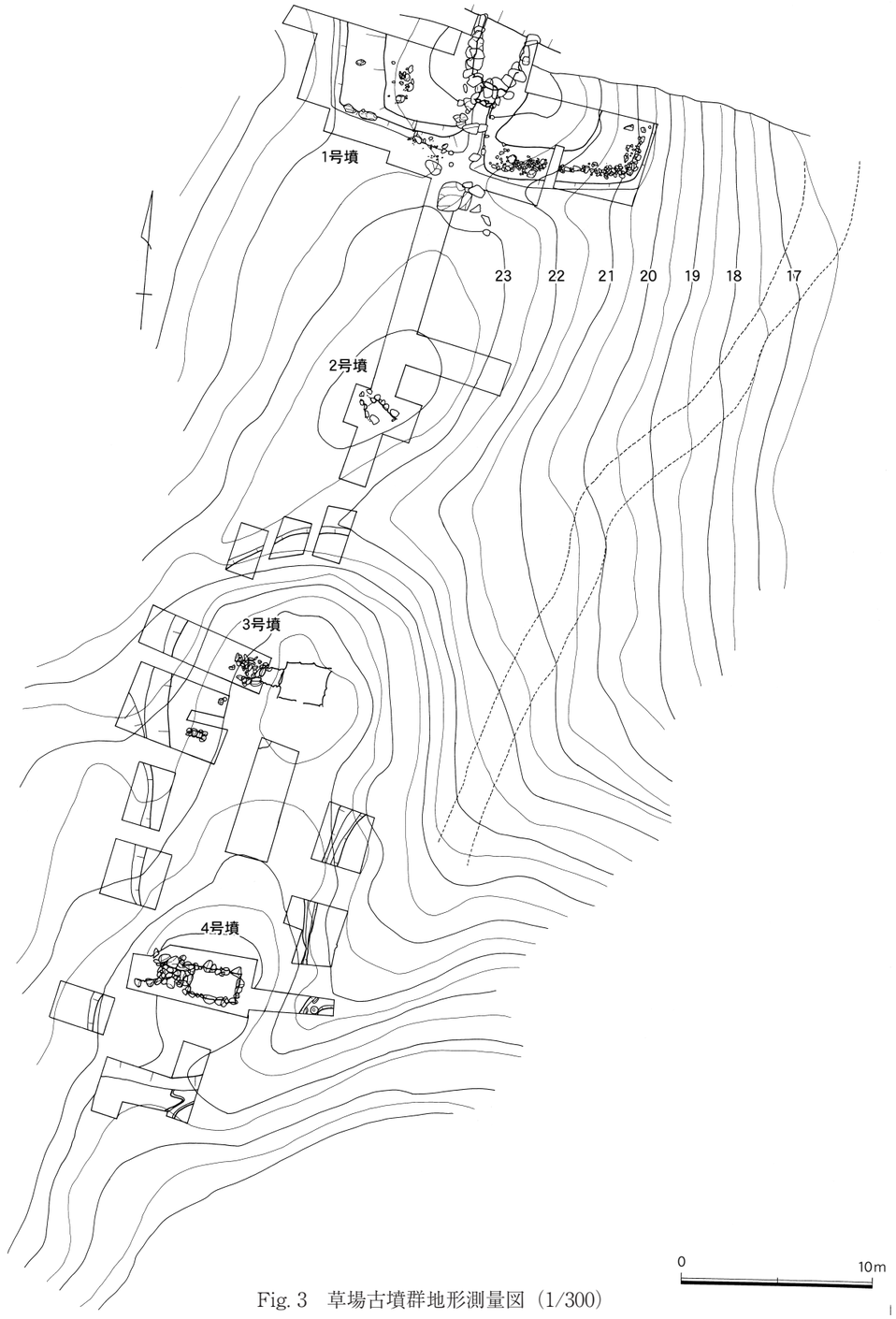


Fig. 3　草場古墳群地形測量図（1/300）

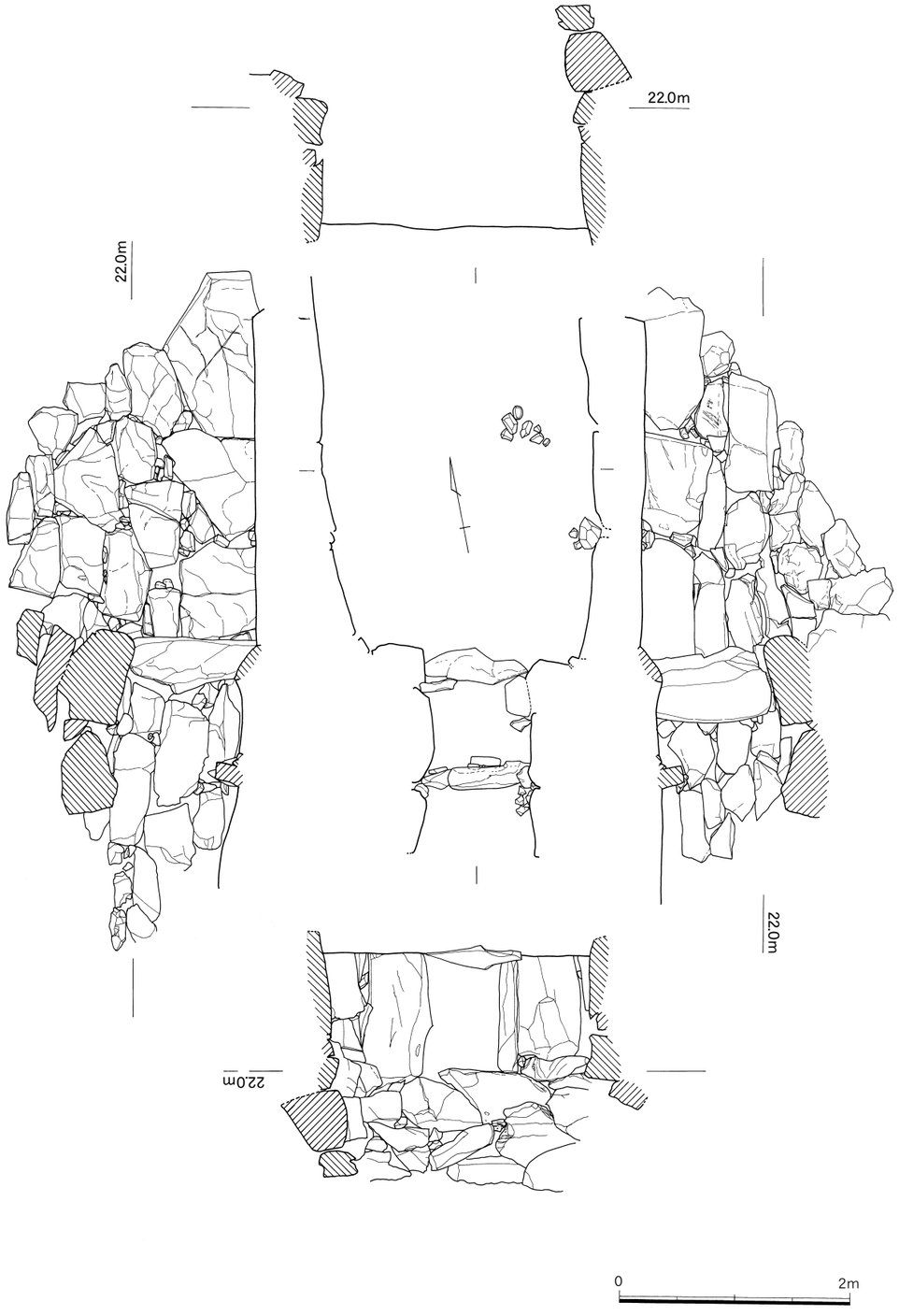


Fig. 4　1 号墳石室実測図（1/50）

もれていた。当初は地形や石室遺存状況から北側に開口すると考えていたが、石室の内部土砂を除去すると南側に開口することが判明した。石室は床面まで撹乱され、土器類や装身具、鉄鏃、刀子などが少量出土したが原位置を保つものはない。敷石も床面にはわずかに拳大の石が残るのみであり、全体に施されていたか明らかではない。

石室（Fig. 4 ）　玄室は長方形で最大幅229cm、羨道部に向かって幅を狭め、南端幅190cm、現存長325cm、残存高215cmを測る。羨道幅84cmで墓道に向かってわずかに開き南端幅106cm、高さ95cm、長さ176cmの規模である。玄室の右側壁には大きめのやゝ扁平な板状石を横長に 3 石据え、腰石としている。その上面はほぼ平坦に揃え、その上に小振りの横長の石を据え、横目地を通して二段積み上げている。更にその上に二、三段丸味のある石を縦積している。壁面は軽く内傾する。左腰石も右壁と同様に扁平な板状石を横長に 3 石据えるが、その上面は右壁と異なり凹凸があり、その窪みを小礫で埋め、床面から80cmの位置で平坦にするが目地は通らない。右袖石は 2 石で構成され、奥に玄室から続く幅65cmの袖石を縦位置に配置し、左袖石との間の床面には梱石を据える。この梱石と奥の袖石に接して、幅55cm、高さ100cm以上、厚さ17cm前後の大きさの板状石を羨道に張り出して縦位置に配し、楣石を支えている。羨道には 2 箇所に梱石を設けている。玄門部には上端が尖る面を上に向ける横長の 1 石を据え、その南75cmの位置に 2 石を組み合わせ平坦な面を上向にしたものである。大きさは袖石部で幅87cm、南端で106cm、高さ110cmを測る。三段積み上げて墓道へと繋がる。墓道は幅120cm、深さ85cm、長さ 2 mほどで墳丘裾、前庭部へと続く。堆積土層（Fig. 6 ）は自然に堆積した状況を示し、層序は以下のとおりである。①暗褐色土、②暗褐色土で少し黒味を帯び石屑多く含み、わずかに須恵器の破片も認められる。③暗赤褐色土で石屑を多く含む。④赤褐色土で拳大の石を含む。

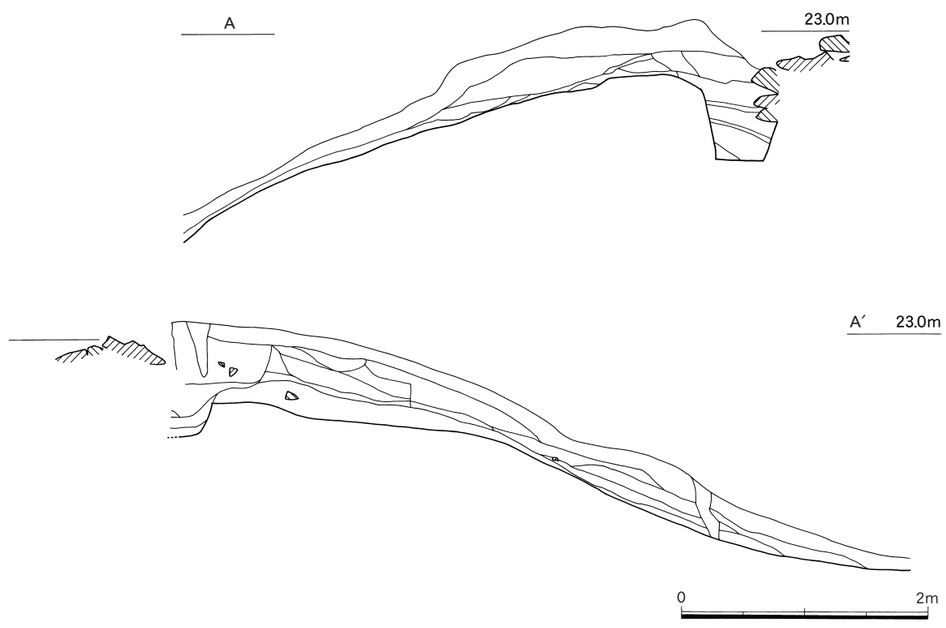


Fig. 5　1 号墳墳丘土層実測図（1/50）

Fig. 6　羨道部土層実測図（1/40）

祭祀遺構（Fig. 7）　羨道部の両側、墳丘上の東側と西側に各々１箇所検出された。西側祭祀遺構は羨道の西3.5m、墳丘の中ほどに位置する。表土下10cm、標高22.5m前後にあり、少し傾斜が緩やかな地点に当たる。北側に寄って４個体の甕が墳丘に直に据えられた状態で出土した。甕の上半部は内部に落ち込んだものや、あるいは周辺に散乱していた破片が多い。接合の結果、口縁部までかなり接合することから、墳丘に置かれていたことが窺われる。甕を置くための掘り込みは確認できなかった。甕と甕の間には転倒した高坏や坏、甕の破片が散乱している。

東側祭祀遺構は墓道の直東側、墳丘裾斜面、列石上端に接するような地点に位置する。西側より一段低く、土器の分布範囲は２m×0.8mで上下二段に置かれていたと推測される。左側の高い位置に大甕（E6）を据え、それを中心として高杯、壷類を配する。大甕の内部には拳大の石が確認できた。意図的に置いた可能性もあるが、底に密着していなく、少し浮いた状況で出土している事から甕が壊れるときに流入したものであろう。東側には一段低い位置に須恵器の横瓶（E10）、小型の甕（E12）、高杯（E11）がある。甕、横瓶は口縁部を上に向け、高杯は横転した状態で出土した。この上下の出土状況は第一には「二時期の墳丘祭祀」と考え、第二は「下層は古墳築造に伴い祭祀を行い、上層は墳丘祭祀」を行ったとの二通りの理解が成り立つ。祭祀土器の設置レベル及び出土面から推察すると「築造に伴う祭祀＋墳丘祭祀」と考えたい。（轟氏は下の須恵器は最初の墳丘祭祀で、その後それらの須恵器の上に盛土をして祭祀を行った「二時期の墳丘祭祀」、更に墳丘自体も二時期にわたる築造と考えていた。）

Fig. 7　列石及び遺物出土状況実測図（1/30, 1/100）

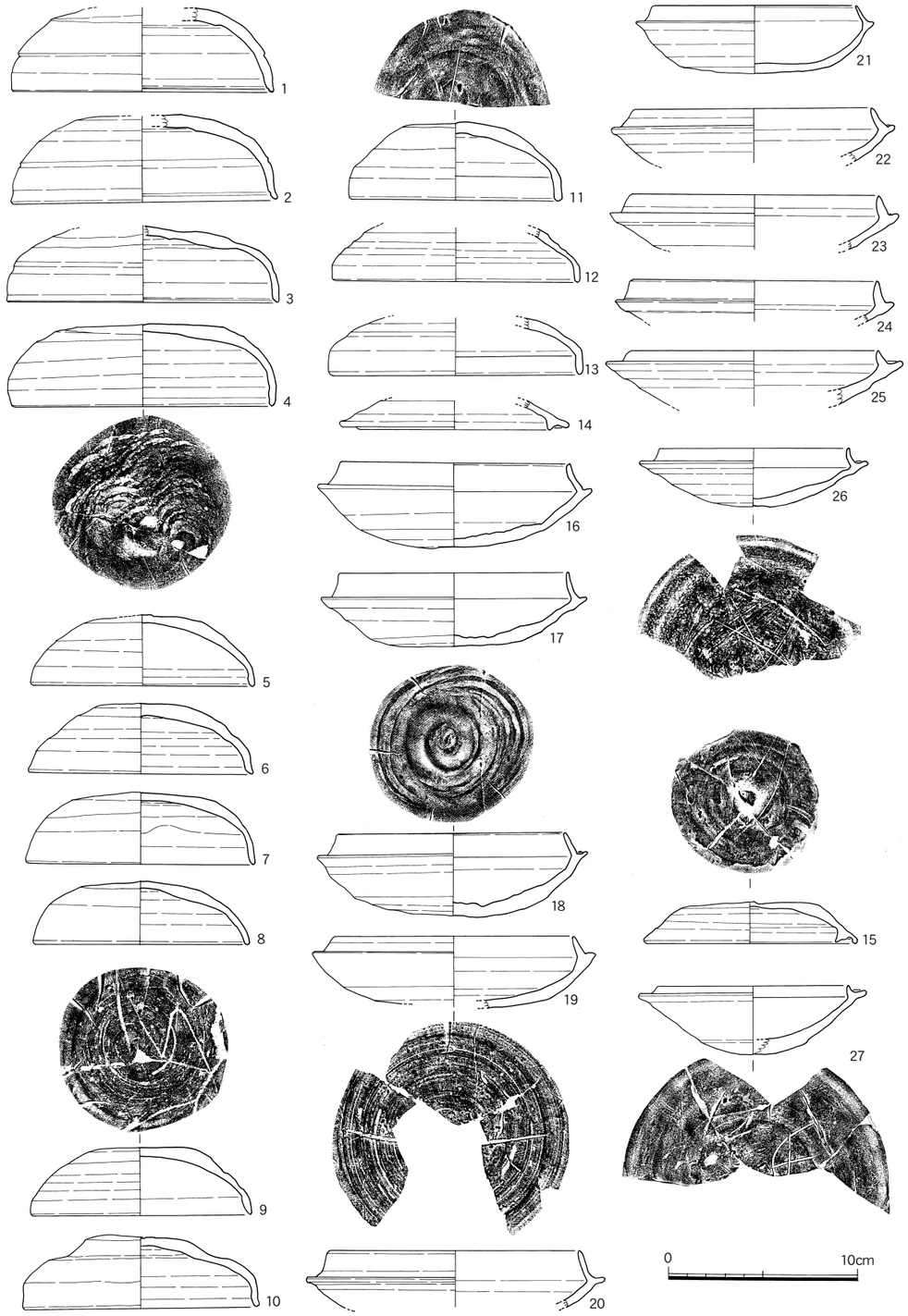


Fig. 8　1号墳出土土器実測図（1）（1/3）

列石（Fig. 7）　墓道の両側に展開する列石である。当初は葺石ではないかと思われていたが、配石が一部に限られて、全体を覆う類のものでは無いこと、同一古墳群の７号墳、10号墳からも列石が廻る例があることから、列石とした。列石は南辺から東辺の裾部にかけて良好に遺存している。墳丘の裾より少し墳頂に寄った位置で、墳裾に沿いながら幅20cm～40cmの広がりをもち、南東隅で逆Ｌ字状に屈曲する。用いている石は５～20cm大の角礫で大小混在し、数段積のところや、一段積のところ、なかには全く列石がないところもあり、総じて乱雑に敷き詰めた状況を示す。南辺は墳丘裾を墓道から東へ直線的に延び７mの位置で直角に北側に折れ、2.7m地点まで続く。さらに北側へ続いているが幅1.4mが未調査、その北側は崖面になっているので何処まで続くのか、或いは消滅するのか明らかにすることはできなかった。列石の土層を観察すると墳丘盛土の赤褐色土の肩部に土留状に三石を積み上げている状況である。

墓道西側の列石は小振りの礫を数個配するだけの簡易なものである。南西隅の近くには長辺が１m弱の横長の大振りの石を２個横に並べている。そのほかには配石は認められない。出土した土器は墓道、前庭部、南辺墳丘裾の黒褐色土から多量に出土しているが、いずれも大小に壊れた状態の破片であり、原位置を保った土器はなく墳丘から転落した遺物の可能性が強い。

前庭部東側に検出した溝は第１号墳の封土がある程度崩落した段階で掘り込んでいる。南側の肩部は調査区外へ広がり、全体の形状は明らかではなく、その性格も不明であるがその位置関係から見ると墓道と思われる。墳丘裾部の遺物は溝上部の黒色土、黒褐色土から多く出土していることや、これらの土器が２号墳に伴うとは考え難く、１号墳の築造時ではなく追葬時の溝と考えられよう。

出土遺物（Fig.8～15）

玄室・羨道部・前庭部出土土器（Fig.8,9 1 ～ 38）1～15は須恵器坏蓋である。1～4は口径13.9cm前後、器高4.4cmを計る、比較的大きい一群である。１は口径13.7cm、器高4.4cm、焼成は良好で黒褐色～暗灰色を呈する。天井部は平坦で2／3が回転ヘラケズリで体部との境に浅い不明瞭な段を持つ。体部は緩やかに開き、口唇部内面に浅い段を持つ。2、3もほぼ同様である。４は平坦な天井部で体部との境は不明瞭で、体部は内湾し口唇部は丸く収まる。天井部は2／3が回転ヘラケズリ、他はナデ調整である。天井部内面には同心円の当て具痕が残る。５～13は天井部が丸味をもち、体部との境が不明瞭な一群である。５は口径11.8cm、器高3.7cmを計る。天井部の中央部は回転ヘラケズリで他はナデ調整である。口縁部はほぼ垂直になり口唇部は丸く収まる。７、８もほぼ同様である。６は天井部と体部の境が不明瞭で沈線状となり、口唇部端が尖る。９～11は口径11.7～12.4cm、器高3.6～4.1cmを計る。天井部は中央部が尖り、体部にかけて内湾し口縁部は直立、口唇部は丸く収まる。９の天井部には窯印がある。11～13も同様な口縁部破片である。14、15はかえりを有する蓋である。15は完形品で口径9.0cm、器高2.2cmを計る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良く紫帯びた濃灰褐色である。天井部は平坦でヘラナデし体部との境に粘土がはみ出したままである。また天井には「×」の窯印が浅く刻まれる。18は口縁部の一部を欠損するがほぼ完形で口径12.0cm、器高4.4cm、底部外面は2／3がヘラケズリ、その他は回転ナデ、内底面には円弧状の当て具痕が明瞭に残る。胎土には砂粒を少し含み焼成は良好で暗灰色を呈する。16の内底面にも幾重にも重複した当て具痕が残る。21は口径10.6cm、器高3.6cmを計り、口縁部の立ち上がりは低く、底部は平坦で器高が低い。22～24は口縁部の立ち上がりが低い一群で浅い坏である。26は小型品で口径10.0cm、器高3.1cmを計り、口縁部は内傾して立ち上がる。底部外面には窯印があり、調整は底部中央部はヨコナデ、他は回転ナデである。27は底部が尖り、立ち上がりがさらに低くなる。底部外面には直線と曲線からなる窯印がある。28～30は須恵器の高杯である。28は有蓋高杯で坏部の体部から口縁部を欠損する。坏底部には同心円の当て具痕が残

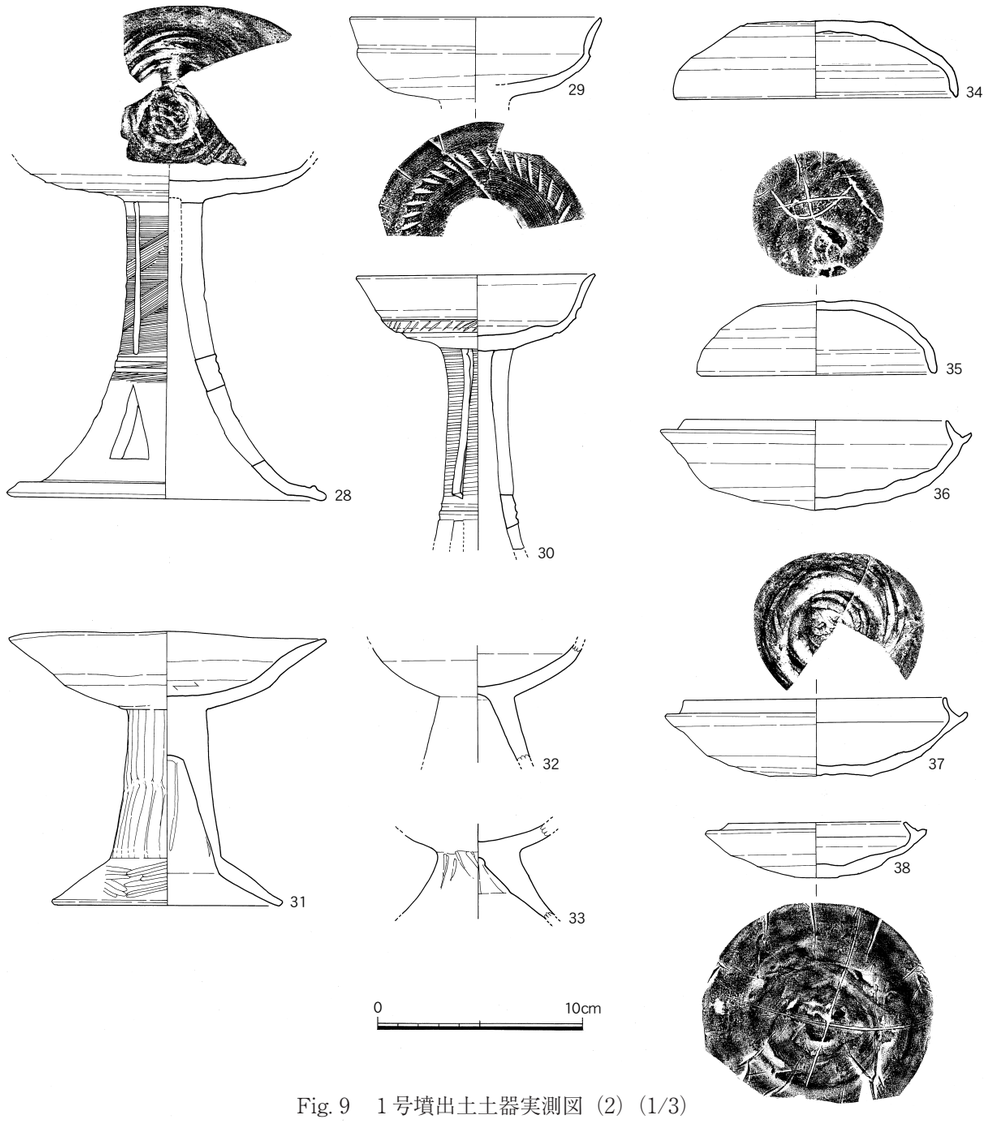


Fig. 9　1号墳出土土器実測図（2）（1/3）

る。脚部は2条の沈線を境に上に長方形、下に三角形の透かしを持つ。上半にはカキメ、坏部はカキメとヘラケズリ、接合部はナデ調整である。29は無蓋高杯で脚部を欠失する。30は口径11.6cm、残存器高13.4cmを計る。坏底部と体部の境に幅広の沈線を廻らしその間に篦描文、脚部には沈線と坏部の境まで長方形の透かしを3箇所に入れる。31～33は土師器の高杯である。34～38は坏の蓋と身である。38は口唇部内面に浅い段、35の天井部外面に直線と曲線を組み合わせた窯印、37の内底面に当て具痕、38にも窯印がある。80、82は玄室と墳丘から出土した破片を接合した提瓶である。80は口径10.6cm、器高25.1cm、胴部最大径20.9cmを計る。口縁部は肥厚しヨコナデ、肩部に鉤状把手を1対貼り付け、胴部の平坦面がカキメ、反対側はヘラケズリの後ナデ調整。焼成は甘く黄褐色の部分もある。82は少

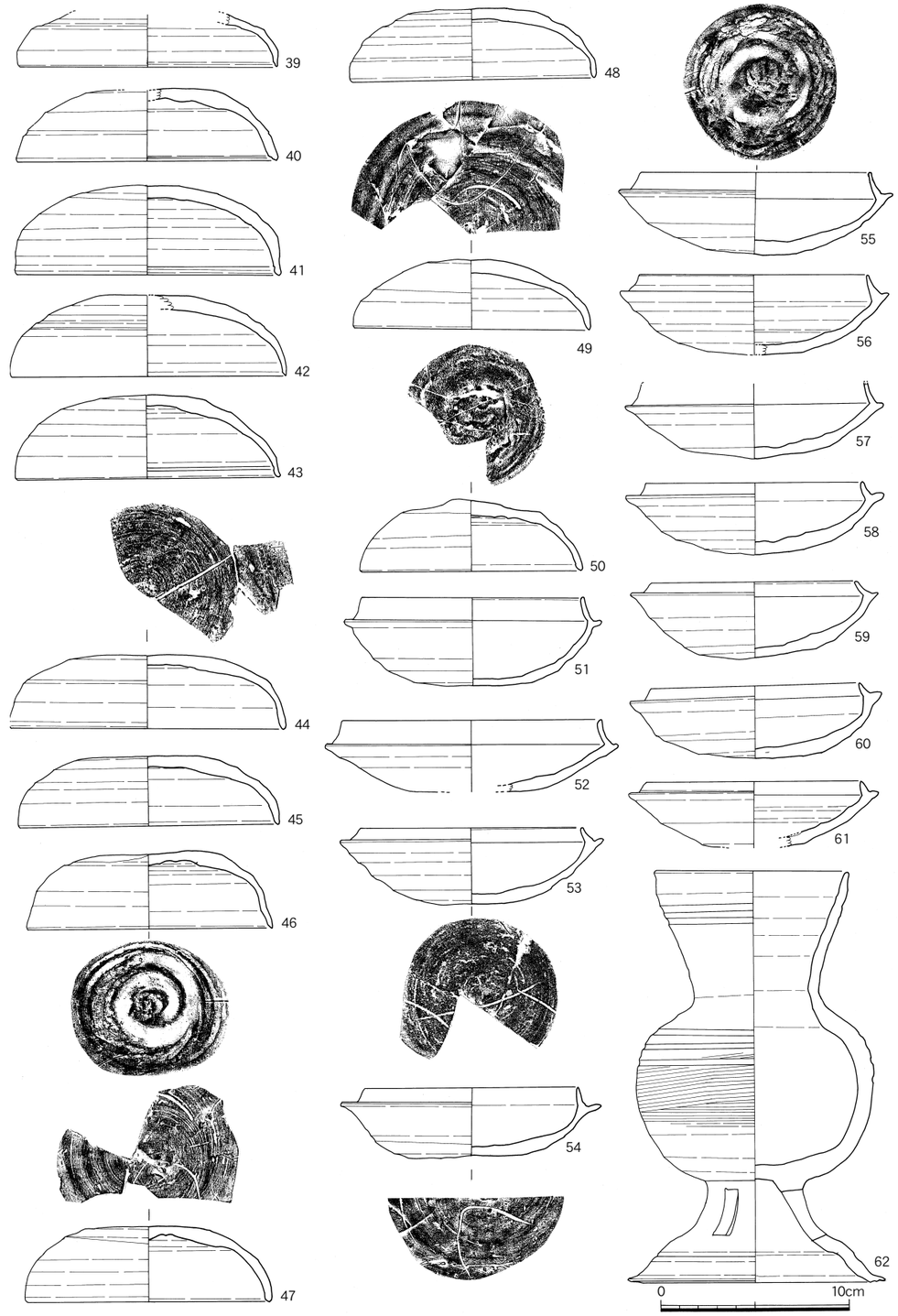


Fig. 10　1号墳出土土器実測図（3）（1/3）

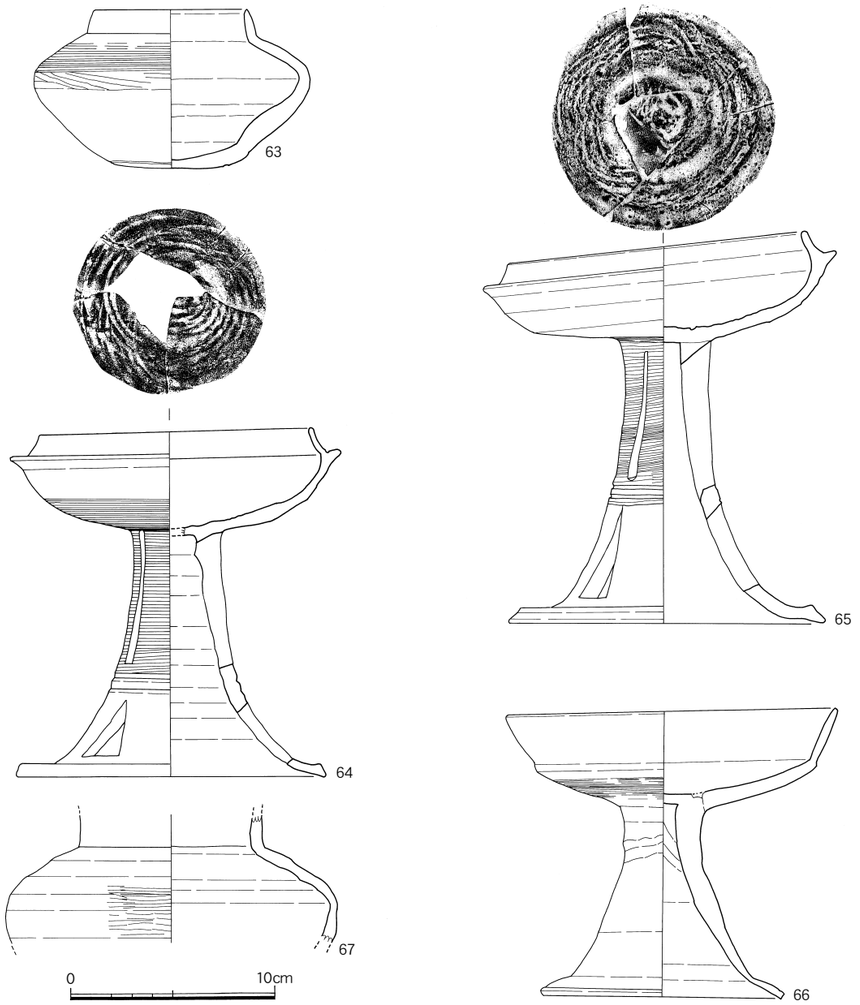


Fig. 11　1 号墳出土土器実測図（4）（1/3）

し小型品で把手はない。両面から側面にかけてカキメ、側面はカキメの後ナデ調整である。

墳丘東側出土土器（Fig.10～11,14,15）東祭祀遺構から出土した遺物及び、この東側墳丘、墳丘裾の土器群を一括して述べる。

祭祀遺構出土土器（49,51～53,63,66,87,88,90,91,100,103）66は土師器、他は須恵器で坏、高杯、短頸壷、提瓶、横瓶、甕がある。49は坏蓋で天井部の2／3を回転ヘラケズリし体部との境は不明瞭で丸い口縁部となり口唇部も丸く収まる。天井部外面には窯印を有する。51～53は坏身で口縁部の立ち上がりが直立に近いものから内傾し低いのもある。63は口縁部を少し欠損するがほぼ完形品の短頸壷である。胴部上半が最大径で口縁部はすぼまり僅かに内傾する。底部は平底で底部脇までヘラケズリ、肩部から頸部までカキメ、内面はナデ調整である。87、88は小型の甕である。87は口縁部を少し欠損するがほぼ完形品で、口縁部は焼成時の歪みが残る。口径14.5cm、器高21.9cm、胴部最大径19.7cmあ

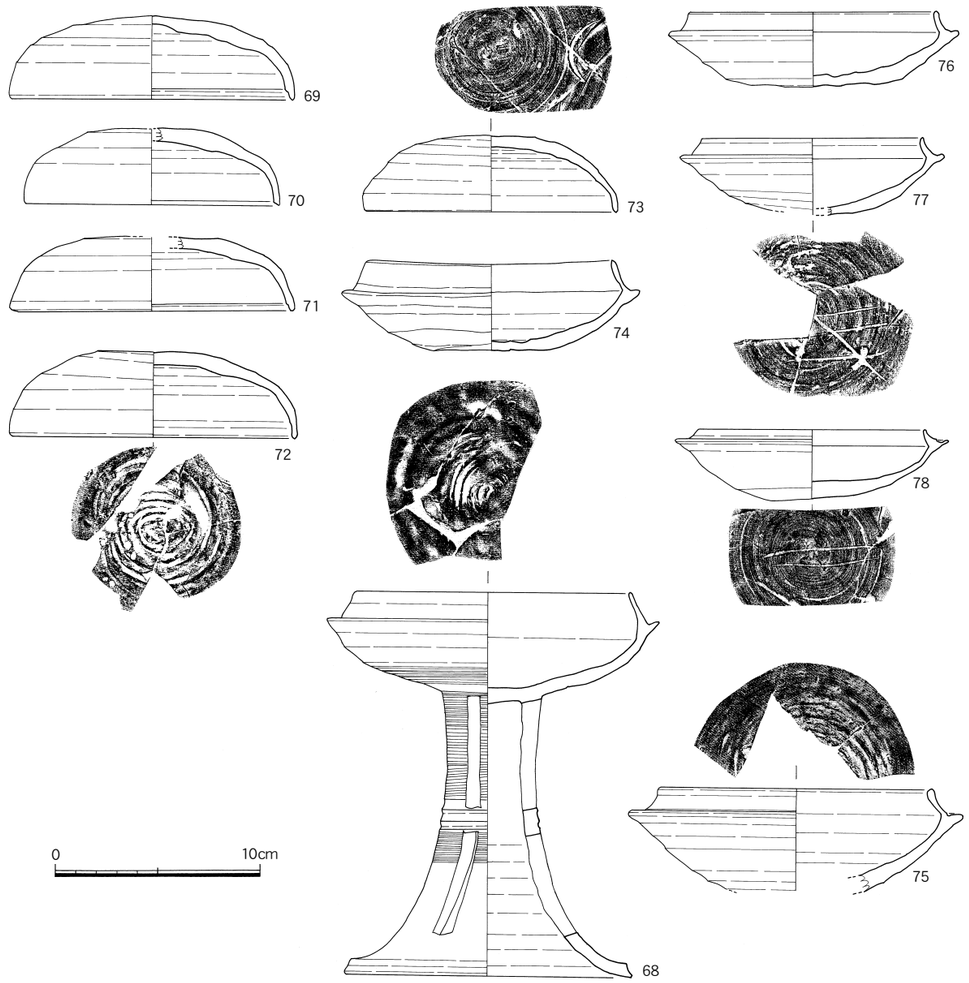


Fig. 12　1 号墳出土土器実測図（5）（1/3）

る。胴部は下半が縦の刷毛目、上半は平行タタキの上から刷毛状工具を強く押さえヘラケズリ状の痕跡を残す。口縁部は端部を肥厚させ、外面を平坦にする。頸部内面には接合痕が残る。88も小型の甕であるが肩部が強く張り底部は丸くなる。底部から胴部下半は偽格子、平行タタキ、カキメ状調整が荒く螺旋状に廻り、胴部上半はカキメ調整、内面には青海波文が残る。胴部には数箇所に須恵器の破片が付着し、その部分と肩部に自然釉が認められる。90、91は横瓶、90は完形品で口径13cm、幅32.7cm、器高30.2cm。外面は平行タタキの後、縦位のカキメ状調整である。91は口縁部を欠損する。100は大型の甕で口径25.3cm、胴部最大径44.7cm、器高49.1cmを計る。胴部外面は縦位の平行タタキで上半部はカキメ状のナデ、底部から下半部にかけて４、５条の沈線状になる。内面は平行な当て具痕で上半は外面のタタキと同様な模様となる。頸部外面には「N」の窯印を有する。103は平底の軟質土器である。平底の底部から球形の胴部、短く外反する口縁部となる。端部を肥厚させ中央部を窪める。外面は格子目タタキの後、胴部上半をナデ消す。内面は丁寧なナデである。66は土師器の高杯。

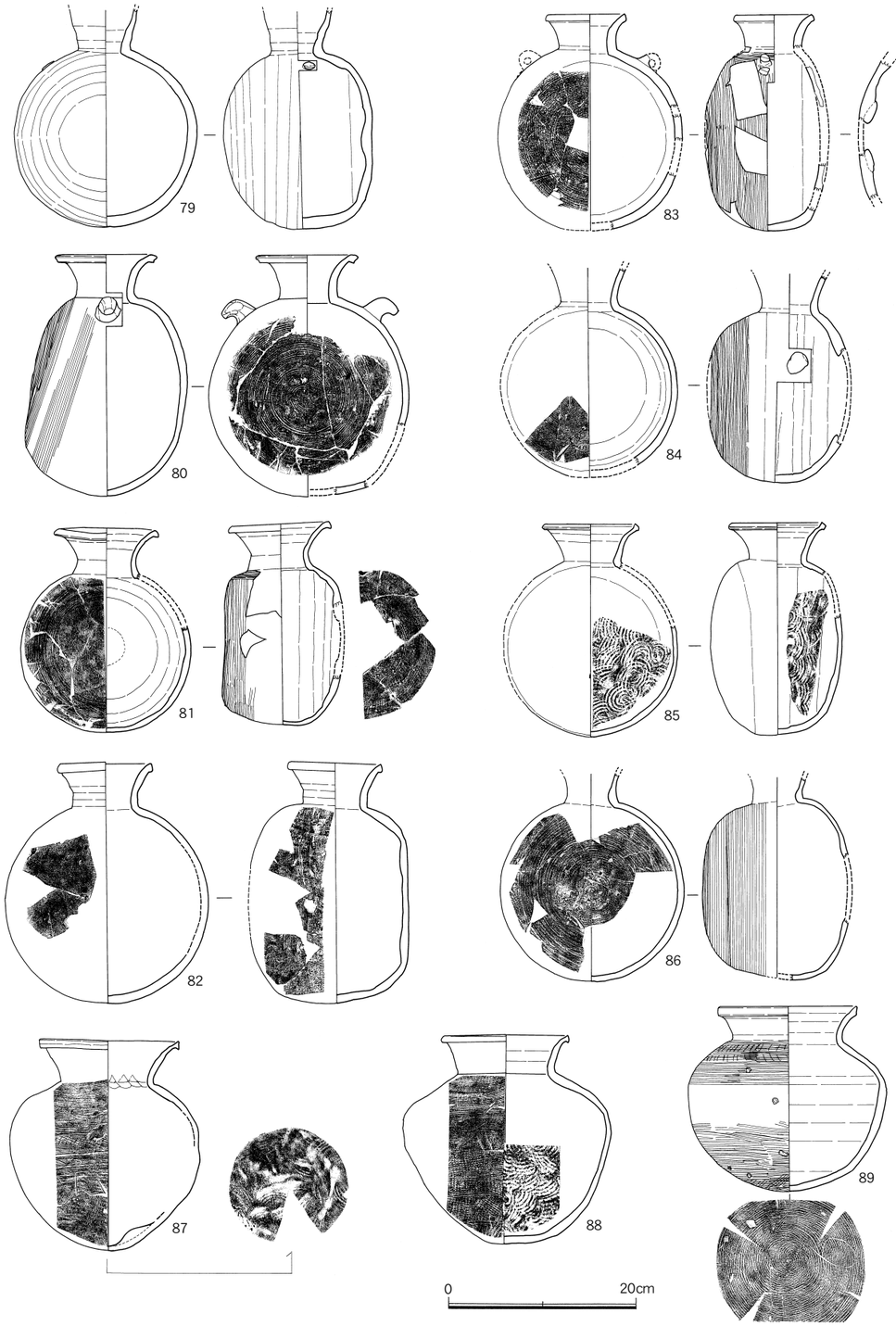


Fig. 13　1 号墳出土土器実測図（6）（1/6）

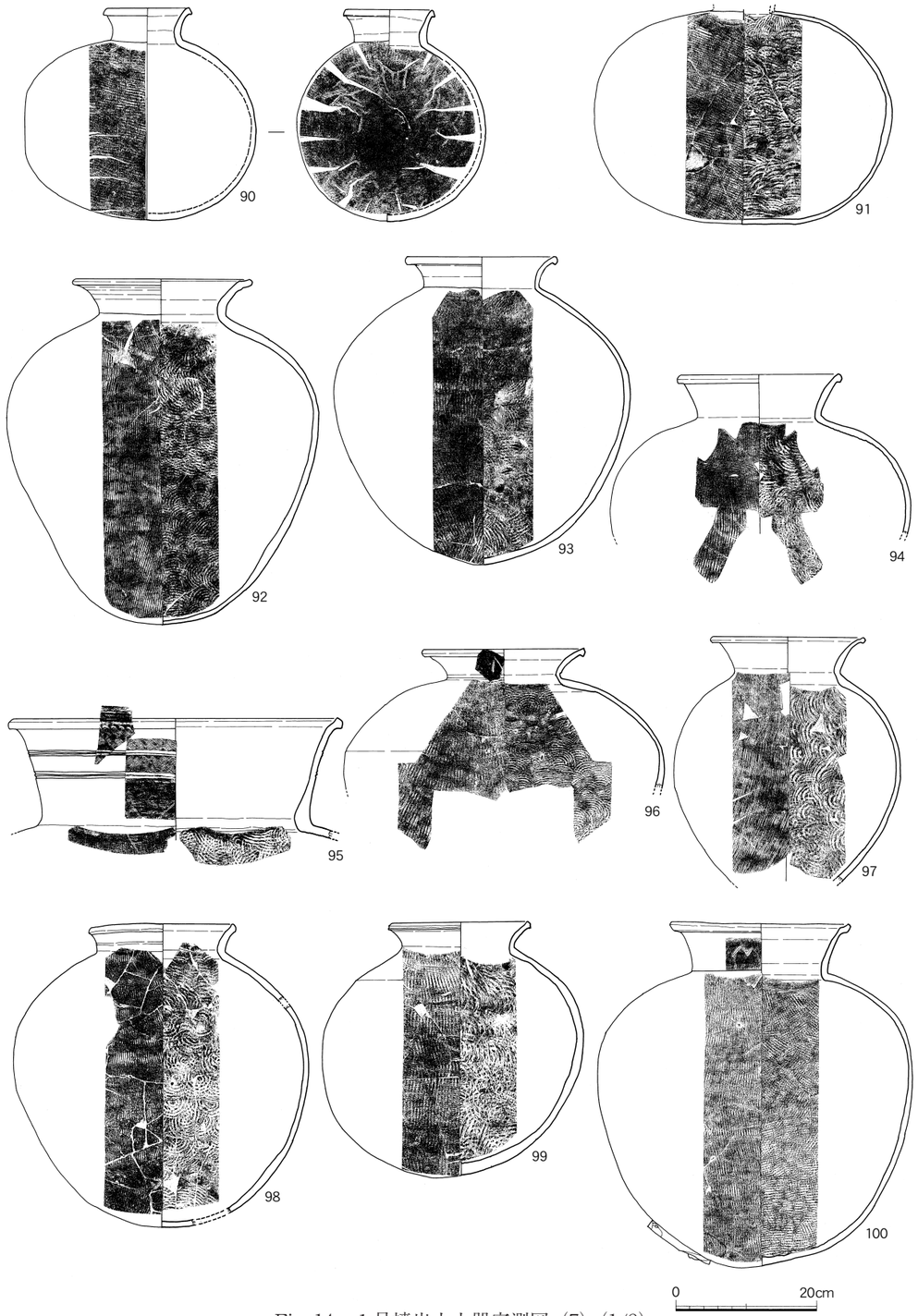


Fig. 14　1 号墳出土土器実測図（7）（1/8）

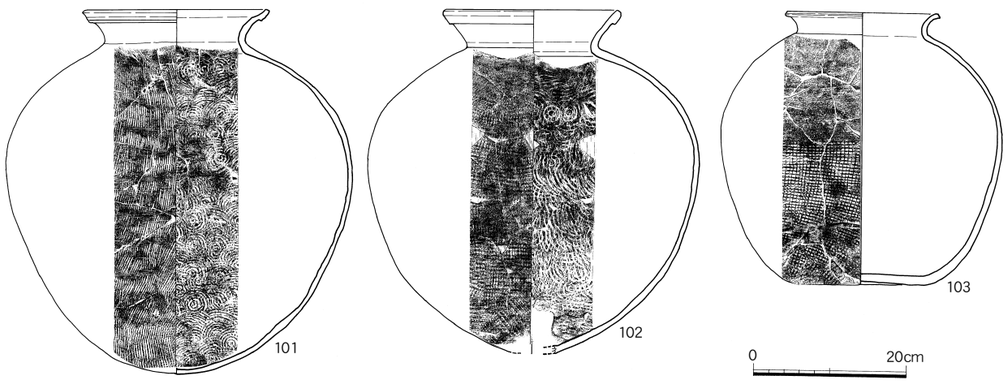


Fig. 15　1 号墳出土土器実測図（8）（1/8）

口径16.1cm器高13.6cm、脚はハの字に開き、内面に絞り痕が残る。

墳丘出土の土器（fig.10,11,13,14,15）須恵器である。39～48は坏蓋である。39～42、46は口径14cm前後で口唇部に段もしくは沈線を有する。43は口唇部は丸く収まり、内面に沈線、天井部外面に窯印がある。46の天井内面に当て具痕が残る。47、48、50は口唇部が丸く収まる一群で、47、50の天井部外面に窯印を有する。54～61は坏身で54、55は口縁部の立ち上がりが直立に近く、54は外底面に窯印、55は内底面に当て具痕がある。56、57は口縁が内傾、58～61は口縁部の立ち上がりが低く内傾する。62は脚付壷で2／3ほどの遺存である。口径10.4cm、器高21.7cm胴部最大径12.5cm脚部に長方形の透かしを３箇所に設け口縁部に２条、胴部に3条、脚部に１条の沈線を廻らす。胴部下半はカキメ、他はナデ調整である。焼成は良く黒褐色を呈する。64、65は二段透かしの高杯である。透かしは２条の沈線を境に下には三角形、上に長方形、脚部から杯底部にカキメ調整を行う。79、80、84、85は提瓶である。79は頸部から口縁部を一部欠損するが他は遺存する。平坦面から側面、凸面にかけてヘラケズリの後ナデ消す。肩部に釦状に粘土を貼り付けている。凸面の胴部には径６cmの粘土板を貼り付ける。また胴部上半には自然釉が点々と付着する。85はほぼ同様の器形であるが把手はなく平坦面の胴部にはカキ目が残る。95～99は甕である。95は頸部から口縁部が外に開き立ち上がる大甕の口縁部破片で、口径47.5cmを計る。頸部に２条の沈線を廻らし、その間に波状文を描く。胴部外面は平行タタキ、内面は青海波の当て具痕が残る。96は胴部が強く張り、97は倒卵型の胴部で頸部を強く外反させ口唇部を肥厚させる。調整は96と同じ。頸部外面に100と同様な窯印を刻む。98は球形に近い胴部に外反する短い頸部で口唇部を肥厚させる。胴部外面はカキメ状調整を荒く行いタタキ痕を消す。内面には青海波文が残る。99は球形の胴部で、98と同様な調整。

墳丘西側出土土器（Fig.12,13－86, Fig.14－92～94, Fig.15－101,102）出土した土器は土師器も含まれるが図示したのは須恵器だけである。69～73は杯蓋である。天井部はヘラケズリ、体部から内面にかけてナデ調整である。69～71は口唇部内面に浅い段をもち、71、72の口唇部は丸く収まり、72の天井部内面に当て具痕､72の天井部外面に窯印がある｡74～78は杯身である｡74は口縁部の内傾が弱く、口径12.1cm、器高4.2cmを計る。75は内底面に当て具痕がある。77、78口縁部の内傾が強く低い。外底面に窯印がある。101、102は中型の甕である。101は口径24.5cm、器高47.8cmを計る。

他に刀子２、鉄鏃３、不明鉄器３、ガラス小玉（ブルー）31が出土しているが行方不明である。

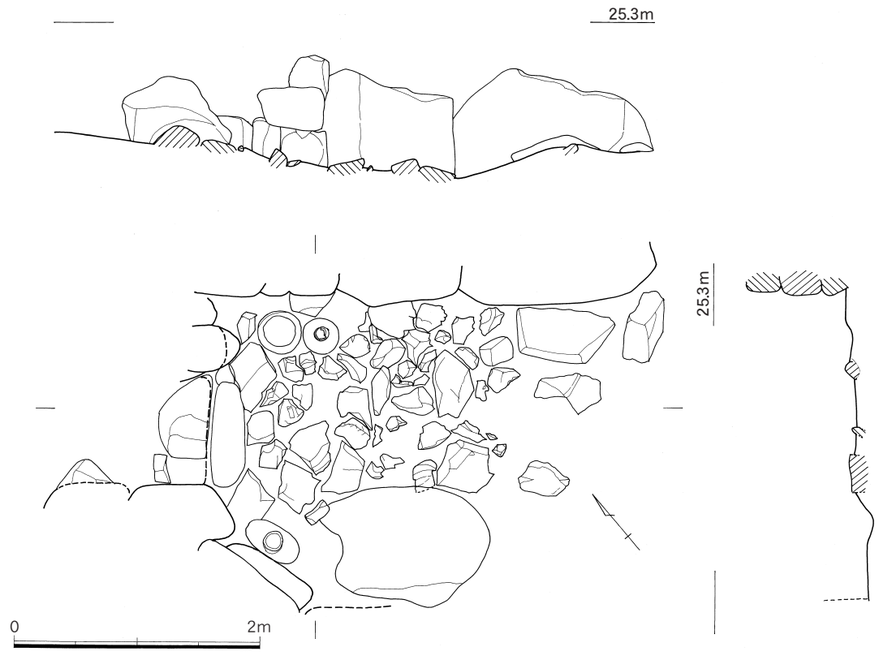


Fig. 16　２号墳石室実測図（1/50）

３．２号墳の調査

南北方向のトレンチにより確認した古墳である。丘陵の尾根線上に立地し、北側を1号墳築造により限られ、南側も同じく3号墳により限られた歪な長楕円形の平坦部に位置する。標高24mの頂部にあり、大きく削平され、墳丘の盛土はない。

石室（Fig.16）主軸を南東－北西にとる両袖の横穴式石室である。規模は幅60cm、現存長195cm、高さ30cmを測る小型の石室である。石室の遺存状況は悪く奥壁、天井石もなく、側壁から羨道部にかけての腰石だけである。右側壁に二石と羨道部に二石が遺存するが、右側壁の玄門部近くの石は外側に開いるが提瓶が側壁に接して出土していることから本来の位置と推測した。その東側は敷石が消失していることや掘り込みが浅いことから本来の位置を保っていない部分がある可能性が強い。左側壁は奥に横長の大きめ石を据え、その手前に柱状の石を縦位置に置く。袖石との間に小振りの石を数段積み上げる。床面には数cm～20cm前後の角礫を敷き詰めるが、疎らでかなり凹凸が見られる。遺物は左側壁近くで壷、蓋杯各々１点、右側壁近くで提瓶１点の完形須恵器が副葬されている。

石室と羨道の仕切に扁平な横長な梱石を配する。両側に一段に築いた側壁があるが本来の位置かは不明。羨道幅35cm、高さ20cm、現存長27cmを測りさらに北西に延びる。

墳丘　トレンチ調査で、墳丘の全面調査は実施していない。トレンチ内では表土の直下は地山の赤褐色土になる。古墳を廻る周溝や地山整形、あるいは盛土も認められずその規模は不明である。

出土遺物（Fig.17）

石室内から４点の須恵器が出土した。いずれも床面から出土の須恵器である。１は須恵器の杯身で口縁部の一部を欠くがほぼ完形品だが歪である。天井部はヘラケズリ、他はナデ調整である。口径13.4cm、器高3.7cmを計る。平坦な天井部から丸い体部中ほどに稜をもち、直立気味の口縁部となる。

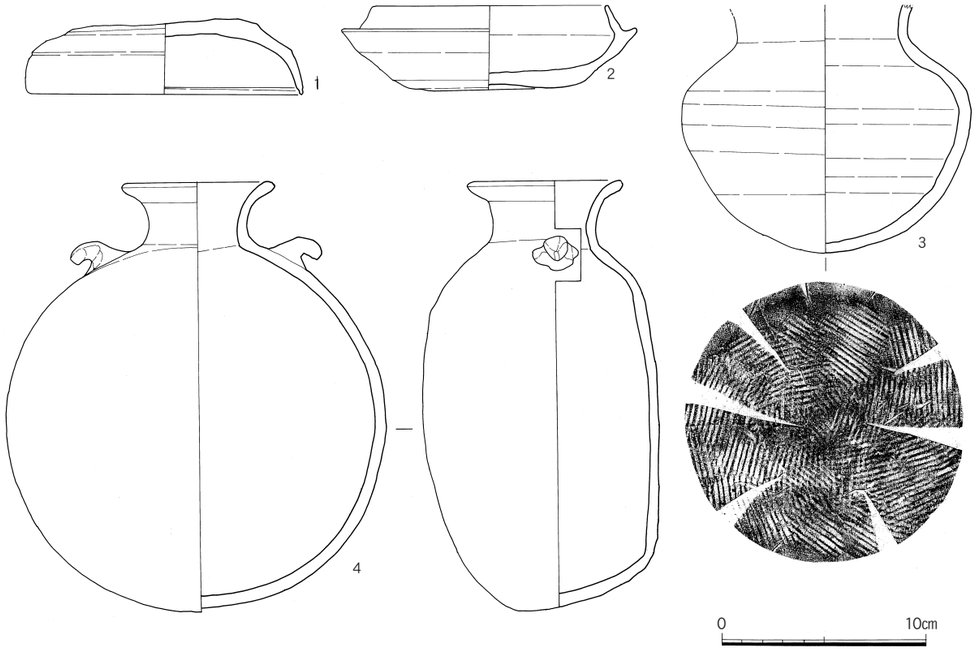


Fig. 17　2号墳出土土器実測図（1/3）

口縁部内側に鈍い段を有し天井部となる。2は坏蓋で口径11.5cm、器高4.2cmを計る。胎土、焼成は1とほぼ同じ。平坦な底部から緩やかに開き蓋受け部となり、内傾して立ち上がり、口縁部となる。底部外面は中心が窪み、ヘラナデ、平坦部はヘラケズリ、底部内面は当て具痕をナデ消し、他はヨコナデしている。3は小形壷で口縁部を欠損する。胴部最大径は上半にあり14.1cmを計る。胎土には白砂粒を多く含み、焼成は良好、暗灰色ないし黒褐色である。底部外面には木目がある平行タタキ痕が明瞭に残り、内面には同心円の当て具痕が微かに残る。4は口縁部と耳の一部を欠損するがほぼ完形品の提瓶である。胎土には少量の白砂粒を含み、焼成良好で灰褐色から黒褐色を呈する。口径7.6cm、器高20.8cm、胴部最大径18.8cm、胴部厚11.4cmを計る。一面は丸く、裏面はヘラケズリして平坦、側面は1／3がヘラケズリ、肩部には退化した把手を貼り付ける。

4．3号墳の調査

尾根線上に位置する古墳で径約15m、高さ3mを測る円墳である。西側の谷部に向かって開口し天井石まで完全な姿で残る遺存状態の良好な石室である。羨道の一部と石室天井部の一部に盗掘坑が観察され石室内には土砂が流入していた。墳頂部に天井石の一部が露出している。諸般の事情で調査は石室内の調査と墳丘確認のためのトレンチ調査だけに留った。

石室（Fig.18）

主軸を西北西－東南東にとる両袖の横穴式石室である。石室は全長445cm、玄室の規模は奥幅196cm、前幅179cm、左幅212cm、右幅220cm、高さ237cm、羨道は奥幅86cm、前幅65cm、高さ108cmを測る。玄室は奥壁の幅が前幅より15cm広く、長さも左壁が若干短いがほぼ正方形である。奥壁には高さの異なる二枚の腰石を据え、二石の高低差をなくすため大小の転石を充填し上端を平坦に整え、横長の石

Fig. 18　3号墳石室実測図（1/50）

を据える。この石まではほぼ垂直であるが、この上から順次、同様な積み方をし、持ち送りを強めて天井石に至る。右側壁の腰石は横長の1mを超す大きな二石を組み合わせ、床面では幅を狭め凹凸のある方を下面にし、上面が一直線になるように構築している。上面を平坦にした結果、床面近くでは二石の間に略三角形の空間が開いている。本来は石が充填されていたものであろう。腰石の上には120cm×40cmを測る横長の大石を中央に据え、両側にやや小振りの転石を配し、隙間に小石を詰め安定させている。一、二段目は横目地が通っている。三段目は大きさの異なる石を三石積み間を小石で充填し、目地が通らなくなる。四段目以上は小礫を積み上げ天井石となる。天井石近くには目地が通る箇所もある。左壁の腰石は三石で構築され、上部は右側壁と同様な構築である。

羨道には二箇所に梱石が設けられている。第一梱石は玄門から西へ約1mに位置する。幅20cm、長さ45cmの角張る石と同様な二石を組み合わせている。梱石に接して板状石の閉塞石を立てる。長さ50cm前後で、上端が玄室側へ傾く。第二梱石は玄門に接して羨道に少し入った位置にある。中央部が

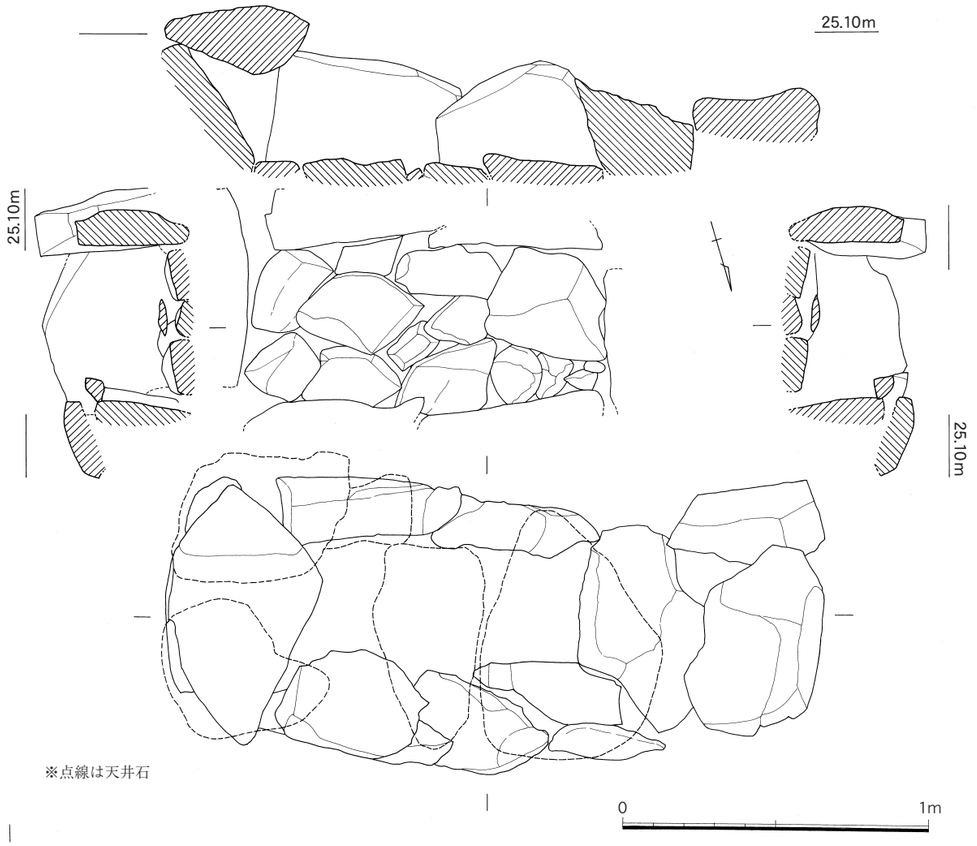


Fig. 20　3号墳石棺実測図（1/20）

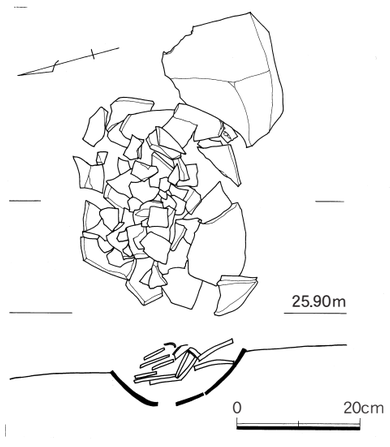


Fig. 19　甕出土状況実測図（1/10）

厚く両端が細い一石で構築する。高さは26cmを測る。玄門には幅65cm以上、厚さ31cm、高さ73cm以上の四角い一石を立て、その上と天井石の間に扁平な石を数石積み上げる。右側壁は玄門の次の石組みまでは比較的丁寧に構築するが、その西側は粗雑な積み方である。

羨道部の右、第３トレンチ北東隅の墳丘上に須恵器の甕が潰れた状態で出土した（Fig.19）。底部から胴部にかけて据えられた状態で出土し、破片の大部分はその中に落ち込んでいた。掘り込みは確認できなかった。甕１個体のみの出土だけであるが、墳丘祭祀と考えられる。

石棺（Fig.18）

墳丘の南西部第４トレンチの北側で検出した箱式石棺で転石を用いた小規模なものである。主軸を北西－南東に取り、内側の規模は111cm×54cm、深さ32cmを計る。側壁は各々２石、木口１石、蓋石は３石を横架し、西木口には蓋石の上

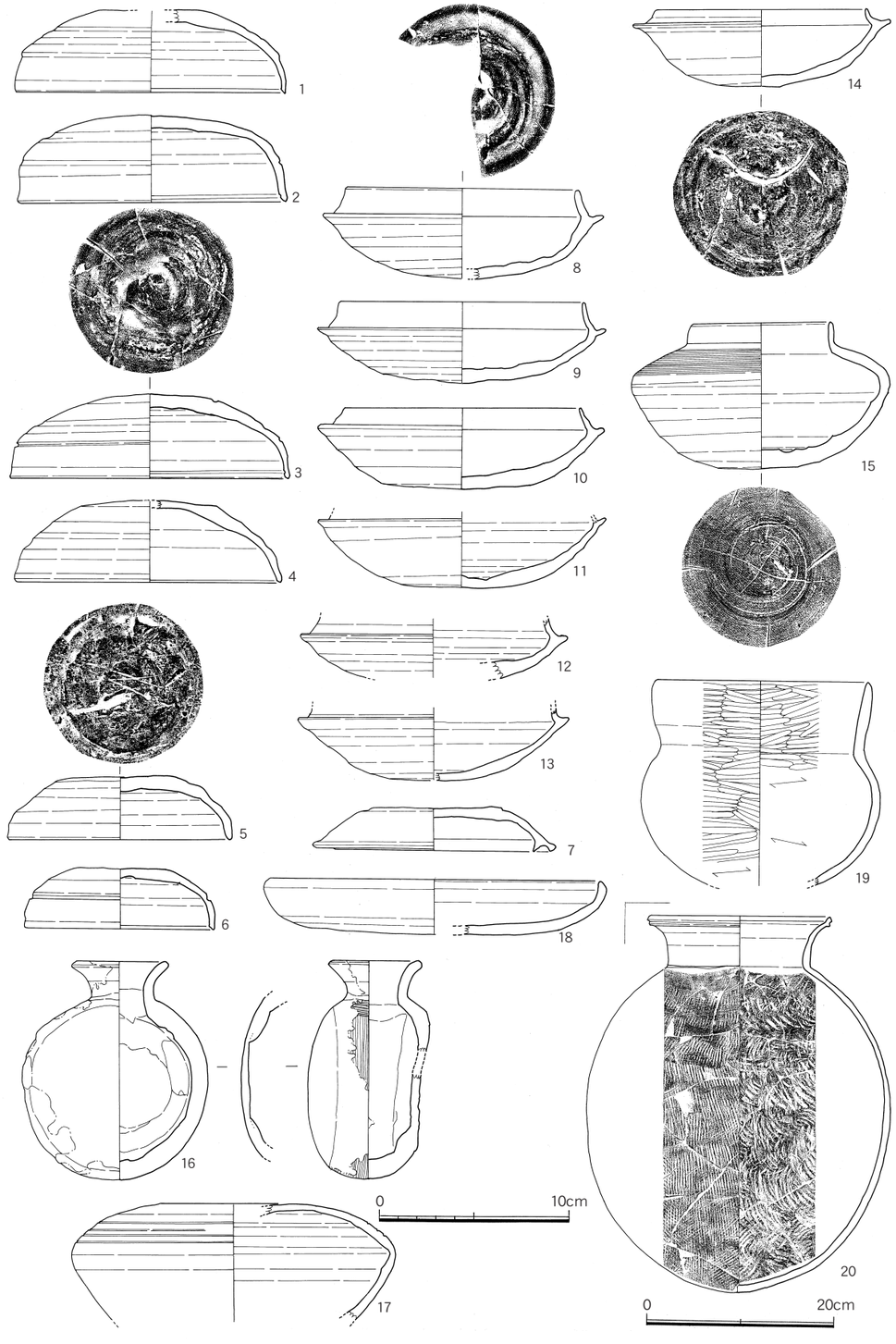


Fig. 21　３号墳出土土器実測図（1/3, 1/6）

に長軸に平行に２石を重ねている。東木口は外側に大きく倒れ、側壁との間に隙間が生じ、蓋石も東側にずれている。床面には敷石は認められない。他は遺存状態が良好であるが、副葬品はない。

出土遺物（Fig.20）

20は石棺の近くで出土したが他は石室内からの出土である。18、19は土師器、他は須恵器である。1～7は須恵器の坏蓋である。１は口径14.8cm、器高4.3cmを計り、天井部2／3は回転ヘラケズリである。天井部と体部の境に浅い段を有し、内湾する口縁部で、口唇部外側は尖り、内面に不明瞭な段をもつ。2、3も同様な大きさであるが天井部が丸みをみち、体部との境に沈線が廻る。口唇部は丸く収まり、内面に稜をもつ。２の天井部内面には同心円の当て具痕をナデ消している。５はほぼ完形品で口径11.8cm、器高3.3cmを計る。天井部2／3を回転ヘラケズリ、胎土には砂粒を多く含み、茶褐色を示し焼成は良好である。天井部に窯印を施す。口縁部の器壁は厚く端部は少し外に開き丸く収まる。６は壷類の蓋、口径10cm、器高3.2cmを計る。天井部2／3を回転ヘラケズリし天井部と体部の境に沈線状の浅い段を廻らし、内湾する口縁部となる。口唇部外側は尖り、内面に浅い段をもつ。胎土には砂粒を含むが精良で焼成も良く暗灰色である。７はかえりを有する坏蓋で口径10.5cm、器高2.3cmを計る。8～14は須恵器の坏身である。８は口径12.4cm、器高4.8cm、底部外面は回転ヘラケズリ、体部から内面はナデ調整である。丸く深い底部から立ち上がり、受け部から口縁部は少し内傾して立ち上がる。内底面には同心円の当て具痕が残る。９は口径13.0cm、器高4.3cm、底部外面は回転ヘラケズリ、体部から内面はナデ調整である。体部は浅く、口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。10は口縁部の内傾が強く直線的となる。12は口径11.2cm、器高4.1cm、底部外面は回転ヘラケズリ、体部から内面はナデ調整である。受け部から内傾して低く立ち上がり口縁部となる。外底面には窯印がある。15は短頸壷で一部欠損するがほぼ完形品である。胴部上半に最大径をもつ扁平な胴部で直立する低い口縁部となる。口径7.2cm、胴部最大径13.6cm、器高7.7cmを計る。胴部下半は回転ヘラケズリ、上半はカキメ調整のあと回転ナデ調整である。外底面には窯印がある。16は完形品の小型の提瓶である。口径5.1cm、胴部径9.6cm、器高11.5cmを計る。横倒して胴部の丸い面を上にして焼成したと思われ、側面全体に白灰色の自然釉が丸い面全体を覆い、釉溜も見られる。調整は全体に粗雑で平坦な胴部にはヘラケズリ、タタキ痕が残り、灰白色、側面は黒褐色を呈する。17は平瓶の胴部破片である。一方に寄った胴部と頸部との貼り付け部には櫛状工具痕が残る。18は土師器の皿で口径17.4cm、器高2.9cmを計る。内外面ともヨコナデで、胎土は精良で焼成よく淡明橙色である。19は小型丸底壷で底部を欠損する。口径11.1cm、胴部最大径12.5cm、現存高8.7cmを計る。球形に近い胴部に少し内湾して立ち上がる口縁部となる。胎土は精良で焼成も良く、赤褐色となる。頸部に縦方向の刷毛目痕が微かに残るが、口縁部内面から外面にかけて横方向の研磨を施す。20は第３トレンチから出土した墳丘祭祀の甕である。胴部は1／2、口縁部は1／3ほど遺存し、口径17.8cm、胴部最大径27.5cm、器高40.4cmを計る。長胴に外反し、肥厚した口縁部を貼り付ける。器壁は薄く６mm前後の厚みである。胴部外面は縦、斜め方向のタタキ、さらに胴部上半に数条を単位とする沈線が約３cm間隔で、途切れ途切れに4条廻る。口縁部はヨコナデ、胴部内面には青海波文の当て具痕が残る。胎土には砂粒をあまり含まず焼成は良好で紫を帯びた灰褐色である。他に刀子８、鉄鏃18、鉄器１、鉇１、鉄斧１、ガラス小玉（ブルー）8、水晶切子玉１、金環１が出土しているが行方不明である。

５．４号墳の調査

尾根線上の基部に位置し石室上半部～天井部が削平を受け平坦になり、封土がなく地山が露出していた古墳である。南側は急激に立ち上がり、その上の丘陵は削平され平坦になっていたが、本来は急

Fig. 22　４号墳石室実測図（1/50）

激な立ち上がりがそのまま続いていたものであろう。またこの古墳群はこれ以上に南には広がらなかったものと推測される。前年に一部室内清掃を行った古墳で、今回は石室の実測調査と墳丘確認のためのトレンチ調査を実施した。石室は３号墳と同じく西側の谷部に向かって開口する両袖の横穴式石室を内部主体とする。石室内には石材が落ち込んだ状態で石室を実測したようで不明な点が多い。

石室（Fig.22）

主軸を西北西－東南東にとる両袖の横穴式石室であろう。石室の全長451cm、玄室の規模は奥幅154cm、前幅146cm、左幅241cm、右幅247cm、高さ115cm、羨道には数段の閉塞石が残り詳細な規模は不明であるが、幅は約89cm～100cm前後、長さ211cm、高さ51cmを測る。玄室は奥壁の幅が前幅より５cm広く、長さも右壁が若干長いがほぼ長方形を呈する。奥壁は幅125cmを測る一枚の腰石を据える。左下隅は内側にすぼまり、側壁との間に三角形の空間が生じ、そこを角礫で充填している。上面はＶ字状に窪み、その窪みに厚さ24cmの板状石を載せ上面を平らに保ち、さらにその上に同様な板状石を載せて平坦になるよう構築している。左側壁の腰石は小振りで幅40cm～90cm、高さ50cm前後の大小様々の石を組み合わせるので縦、横方向ともに目地が通らない。二段目も同様な転石を腰石の凹凸に合わせて構築している。上面は斜め上に横目地が通る。床面には敷石は確認できなかった。

羨道と玄室との境には二個を組み合わせた梱石がある。その外側には拳大から人頭大の礫を羨道部全体に一段～数段積み上げ、中には柱状石を縦位置に置いて閉塞してるのも観察される。そのため羨道部の状況は不明な点が多い。

６．３・４号墳の墳丘調査

３・４号墳については別個の円墳であるのか双円墳・前方後円墳であるのか、いずれかの確証を得られなかったが、一応双円墳の可能性もあるので一括して述べる。

Ａトレンチ（Fig.23）　墳丘北側に設定したトレンチである。南端から1.3mの位置に幅1.45m、深さ

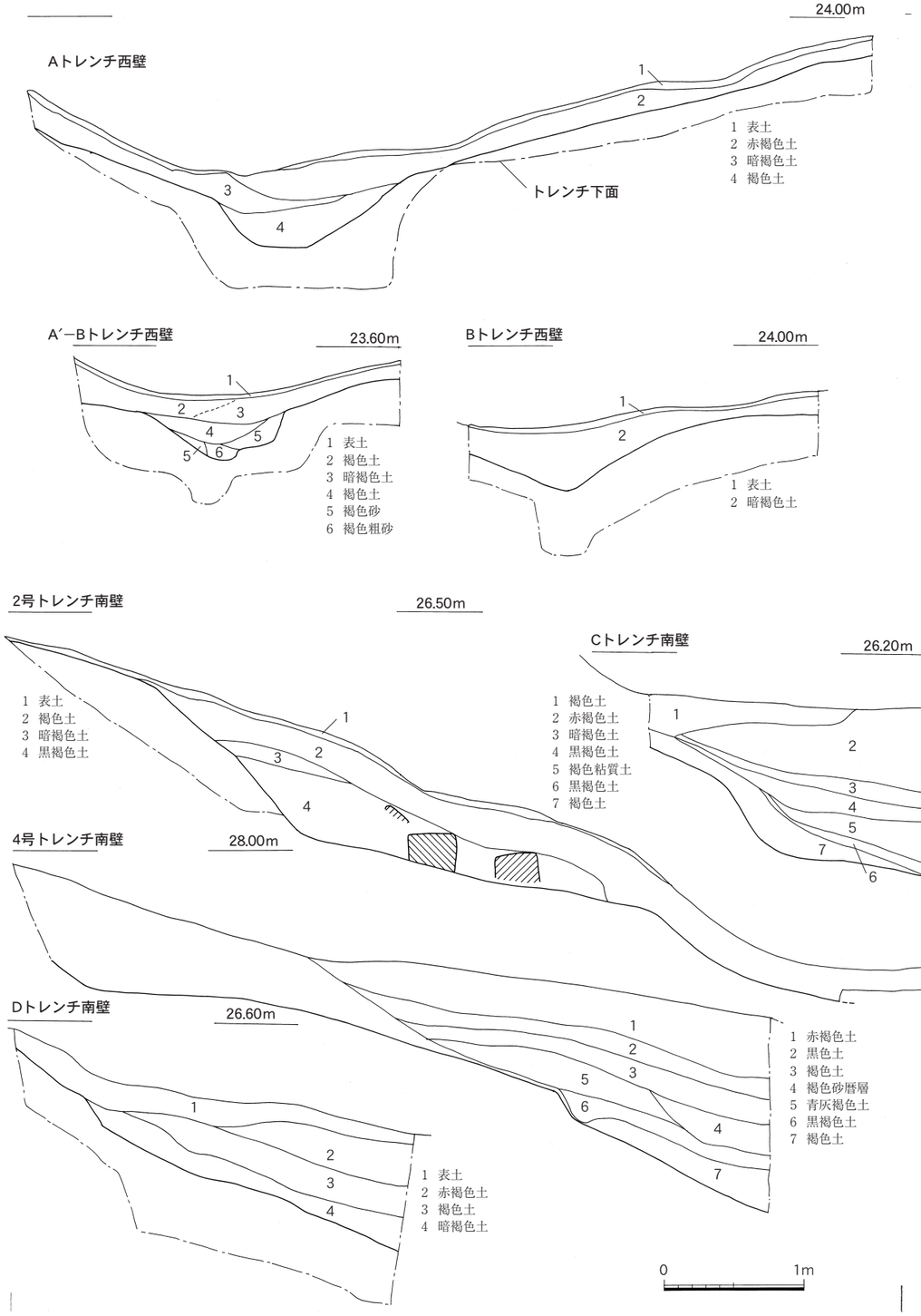


Fig. 23　3, 4号墳トレンチ土層実測図（1）（1/40）

0.26mの溝を確認した。トレンチに直交し、南北に延びる丘陵を切断する。南側の傾斜は強く、北側はなだらかな傾斜を示す。覆土は小石を含む褐色土である。

A′−Bトレンチ・Bトレンチ（Fig.23）　墳丘西北側に設定した２本のトレンチである。トレンチの中央部が僅かに窪む程度の浅い溝である。特に外側の肩部は不鮮明である。表土下に褐色土・暗褐色土が浅く堆積している。暗褐色土からは須恵器破片が出土している。

２号トレンチ（Fig.23）　羨道・墓道の西側に設定したトレンチである。トレンチ西端から東へ1.5mの位置で墳丘端を確認できた。中央部分は角礫を含む黒色土が観察されるが、掘削した面が本来の墳丘面か否か明らかではない。

４号トレンチ（Fig.23）　3、4号墳との境に位置するトレンチである。トレンチの東側は墳丘盛土である砂礫を含む褐色土であるが、いくつかの層に分けられよう。西部は墳丘盛土が墳丘裾に再堆積したものであろう。しかし、その層は上から赤褐色土、黒色土、褐色土、褐色砂質土、青灰白褐色土、黒色土、褐色土の各層に分れ版築状となり、墳丘盛土とも考えられるが、その位置関係を考慮すると無理があろう。

１号トレンチ（Fig.24）　丘陵の尾根部に位置するトレンチである。3、4号墳の中間にあり、周溝あるいは地山造成が行われているかの確認のためである。南側2／3は表土直下で花崗岩バイラン土混じりの岩盤である。墳丘盛土はすべて失われ地山の傾斜面が現われる。この傾斜面の裾は４号墳石室より北へ11.5mの位置にあり、南側への距離5.5mと大きな隔たりがあることから円墳とするには疑問がある。ただ北へ0.5mの地点にも傾斜変換点が認められ、その地点を墳丘裾と考えれば直径13.5mの円墳とも考えられる。３号墳寄りはやや汚れのある花崗岩砂礫層を含む黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土となる。暗褐色土が古墳の盛土、黒褐色土は土坑の覆土と思われる。

C・Dトレンチ（Fig.23）　3、4号墳の西側墳丘裾に位置するトレンチである。Cトレンチの土層は花崗岩バイラン土を基盤面としその上に赤褐色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色粘質土、黒褐色土となる。赤褐色土までは新しい時期の堆積、それ以下は墳丘盛土が二次堆積したものであろう。Dトレンチもほぼ同様の堆積であるが東側0.5mのところまで墳丘盛土を確認できる。

Eトレンチ（Fig.24）　４号墳羨道南西に位置するトレンチである。赤褐色土が厚く堆積し（170cm）その下に褐色土、暗褐色土が薄く堆積している。赤褐色土は新しい時期の堆積でその下は墳丘土の再堆積であろう。

F・Gトレンチ（Fig.24）　４号墳の南墳丘裾に位置するトレンチである。２本のトレンチを設定し、墳丘裾が確認されたので拡張して調査を実施した。F区西壁は調査区の中ほどから北側へ傾斜し周溝状遺構が観察できる。土層は赤褐色土が厚く堆積しているが、C、Dトレンチでは新しい時期の堆積土であると理解しているので墳丘裾、溝とするには疑問な点もある。Gトレンチでは花崗岩バイラン土を基盤層とした掘り込み（溝？）の一部が確認できた。

５号トレンチ（Fig.24）　石室の裏側、東側に位置するトレンチである。墳丘盛土はすでに消失し、墳頂部の石室構築面はすでに基盤の花崗岩バイランド土が露出している。土層は花崗岩バイラン土が二次堆積したもので上から黄褐色砂質土、褐色粘質土、赤褐色粘質土、暗褐色土となる。東側は傾斜が急であり本来的に盛土を行ったのは墳丘上部のみで大部分は地山整形によるものであろう。墳丘端は平坦に均し、部分的に溝状を呈する箇所も見られる。

J・Hトレンチ（Fig.24）　3、4号墳の鞍部東裾に位置するトレンチである。調査区の中央部に南西－北東に延びる溝状遺構を確認。二段に掘り込まれ、Jトレンチでは内側が深く外側が浅い。北端で幅75cm、深さ15cmを測り、南へいくに従い幅を狭め溝は消滅し段差だけとなる。Hトレンチでは

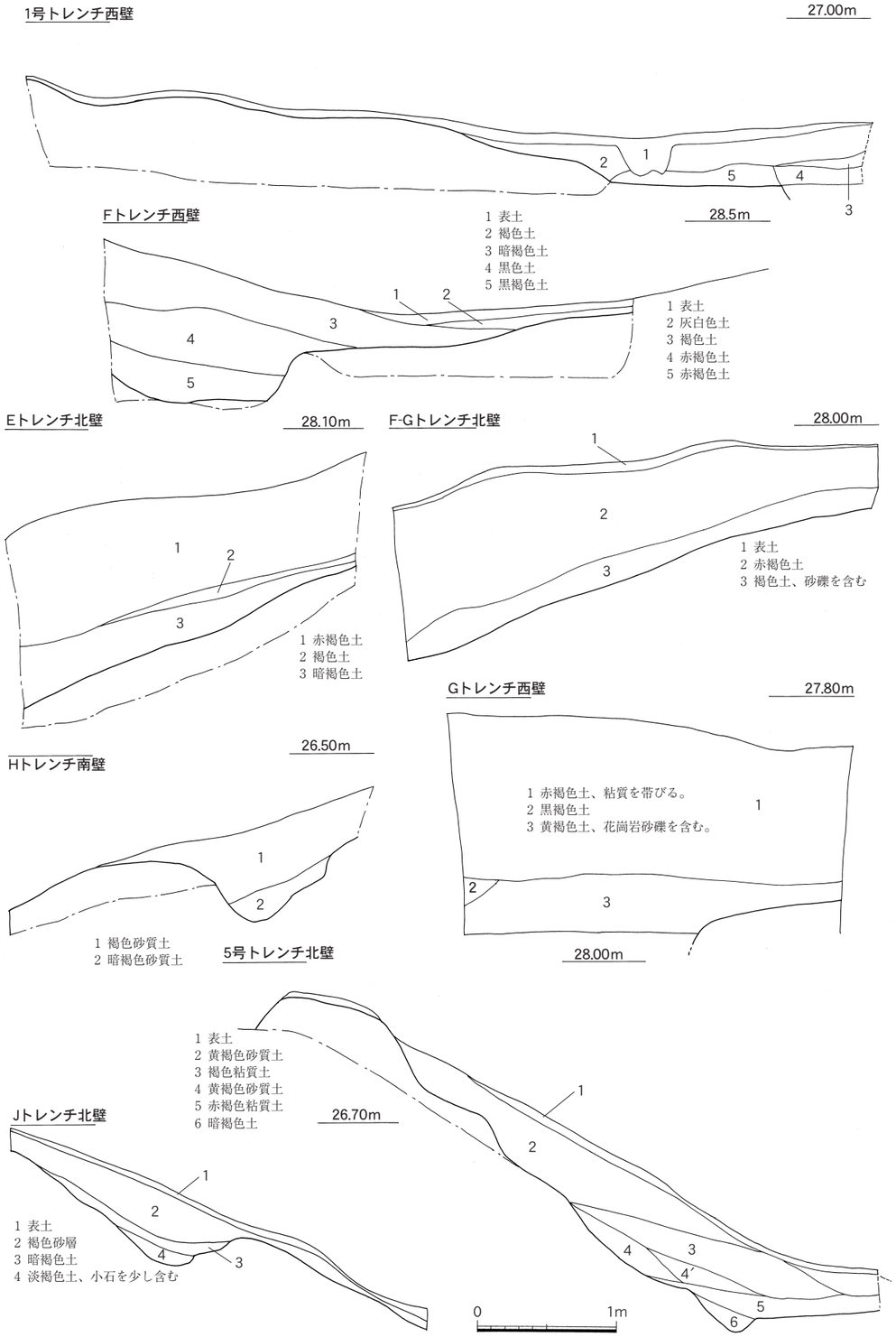


Fig. 24　3, 4号墳トレンチ土層実測図（2）（1/40）

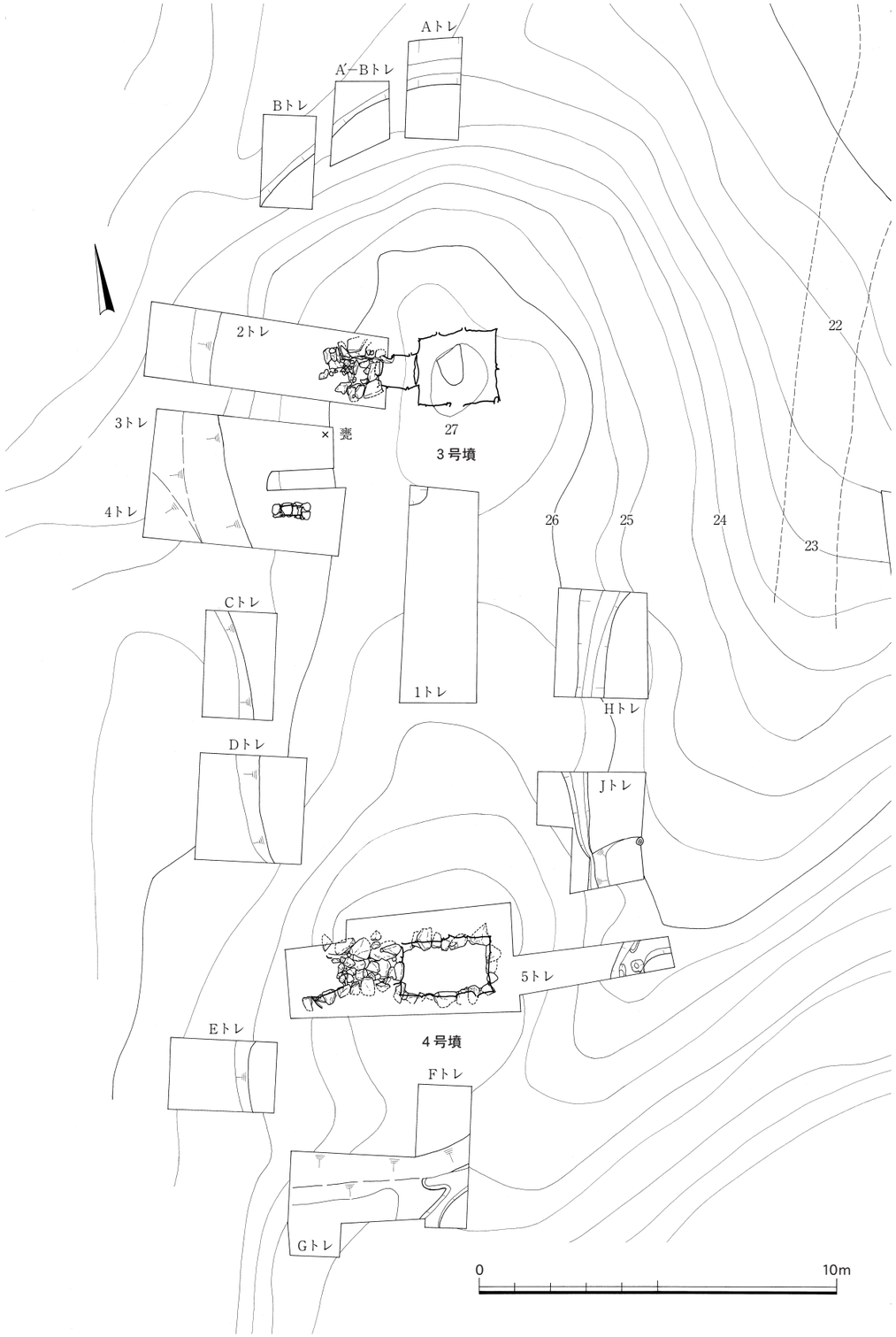


Fig. 25　3, 4号墳トレンチ配置・遺構実測図（1/150）

溝の形が逆に内側が浅く外側が深くなり、幅も序々に広くなり120cmを測る。

3、4号墳の墳丘はトレンチ調査であり不明瞭な点もあるが、両古墳の鞍部に設定した１号トレンチでは両古墳を分離する溝などの遺構はない。３、４号墳の墳頂部では現状で１ｍの高低差しかないが、４号墳は石室床面から１ｍしか遺存していないので、本来は２m前後の比高差があったものと推測される。東側墳丘裾のHトレンチでは両古墳を廻るような状況で溝を確認し一体的に築造された可能性も窺える。この状況は西側墳丘裾の地山造成とも共通する。この溝は４号墳の東裾にいくに従い不明瞭となる。石室の形状は３号墳が方形の玄室に細い羨道を付設しているが４号墳は長方形の玄室に同様な羨道部となり同一期の築造ではないであろう。また４号墳の遺物は確認できないので詳細は明らかではない。トレンチ調査では前方後円墳か双円墳、あるいは円墳かどうか明らかではなので、ここでは円墳２基として報告しておく。

小　結

今回の調査では４基の古墳を調査したが、完全に墳丘まで調査を行ったのは１号墳だけで、それも不十分なものであった。その後、平成元年西側が宅地造成され、新に７基の古墳が調査され合計12基の古墳群であることが判明した。

今回の２次調査では東側の１号から４号墳の調査を実施した。墳丘まで発掘したのは１号墳のみである。１号墳は北側が土取りされているので墳丘の全形は明らかではないが、残存している墳丘の形態や列石の状態から推測すると一辺17m前後を測る方墳と考えられる。また墓道両側の墳丘に祭祀遺構があり多量の須恵器を供献している。墳丘裾からも多くの土器が出土しているが、これらは祭祀遺構から転落したものと考えられる。これらの土器は完全に埋まっているものや墳丘上に転がってるものもあり、数度に亘り供献したものであろう。あるいは築造に当たり、祭祀を行ったものも含まれよう。草場古墳群の中でもこれほど大量の土器で墳丘祭祀を行っているのは１号墳のみで、丘陵頂部に位置していることから、中心的存在といえる。石室は長方形の玄室に短い羨道の付くタイプで比較的古い状態を保ち、須恵器はⅢＡの時期に構築されⅣ期までの遺物もある。４号墳も同様に長方形のタイプの石室であるが、羨道が長く延びている。３号墳の石室は正方形の平面形でやや長めの羨道部となる。出土須恵器はⅢＢが主体で４基の中では新しい部類に属する。

西側の３次調査では６世紀後半から７世紀初頭に構築されているので東側に位置する群はそれに先行して構築が開始され、その後徐々に西側へ拡大したものと考えられる。

終わりに

調査から37年が経過し、やっと報告書の作成を終え調査に参加した者の一人として責務を終えたような気がする。一寸した手伝いのつもりでいたのに加え長い年月の間に記憶がほとんど消え去り、調査に関連する必要な事柄についてさえ曖昧模糊としている。当時の日誌や写真を参考に作成したので事実誤認等があるかもしれないがご容赦願いたい。調査をなされた三木先生や当時調査団結成に尽力された三島格氏、事務係長の三宅安吉氏など亡くなられた関係者の方々も多く、そのご冥福をお祈りいたします。

図　　版

調査中訪れた丸隈山古墳での記念撮影（前列中央が三木先生・1973年８月）

古墳遠景（東より）

1・2号墳調査前全景（東より）

3・4号墳調査前全景（東より）

1号墳羨道部（南より）

1号墳玄門（南より）

1号墳左側壁（東より）

1号墳東側列石（南より）

1号墳東祭祀土器出土状況
（南より）

1号墳東祭祀土器出土状況
（南より）

1号墳西祭祀土器出土状況
（南より）

1号墳西側墳丘（南より）

2号墳石室全景（南東より）

2号墳石室全景（南東より）

2号墳石室全景（北西より）

3号墳遺物出土状況（東より）

3号墳羨道部（南東より）

3号墳左側壁（南西より）

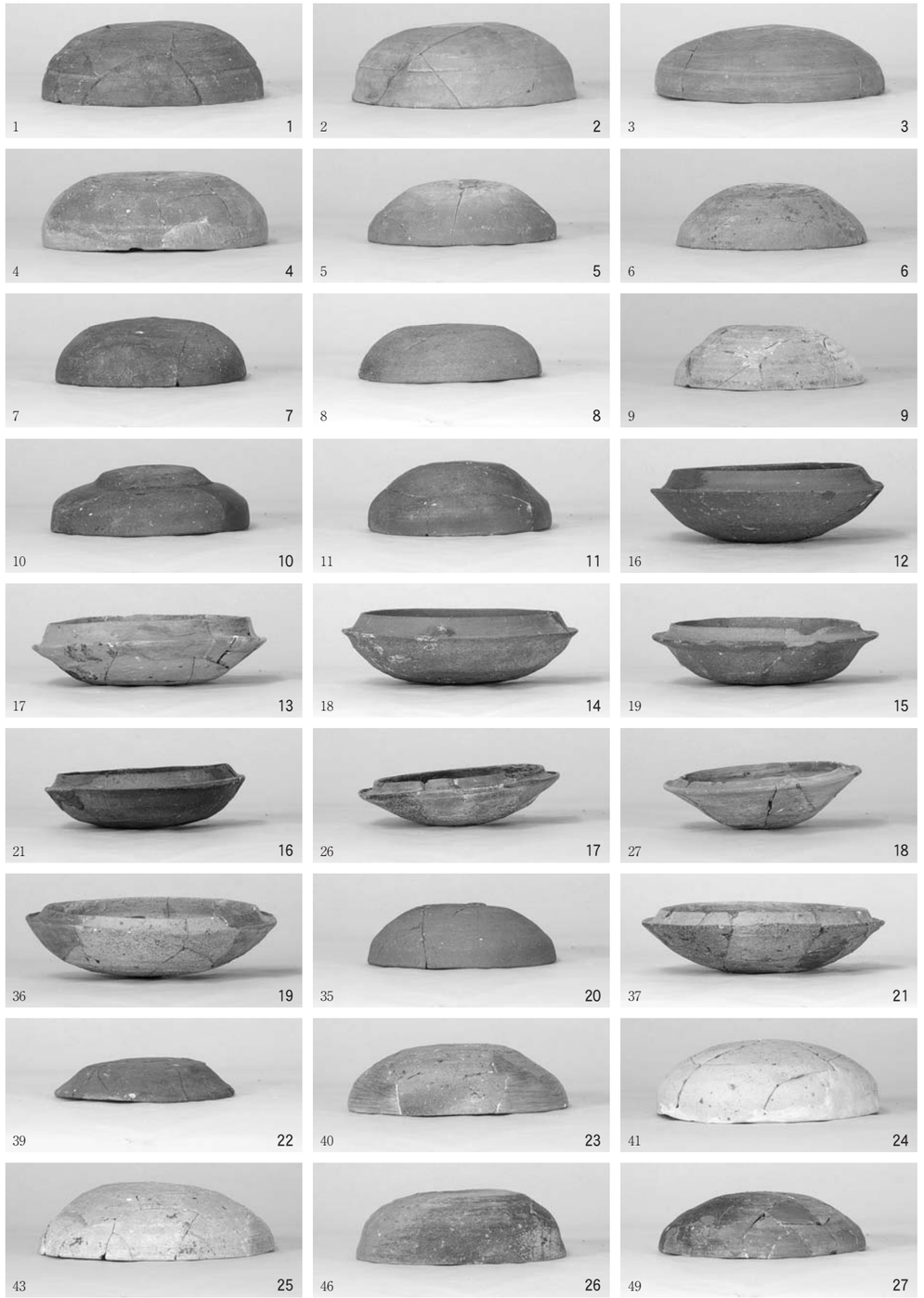
3号墳石棺（南西より）

3号墳祭祀土器出土状況
（北西より）

4号墳石室調査状況
（南東より）

4号墳石室調査状況
（東より）

1号墳出土土器



左下の番号は挿図番号

1～3号墳出土土器

51 28

53 29

54 30

55 31

58 32

69 33

73 34

72 35

76 36

77 37

78 38

2－1 39

2－2 40

3－1 41

3－2 42

3－5 43

3－6 44

3－7 45

3－8 46

3－9 47

3－10 48

3－14 49

3－16 51

3－19 52

3－15 50

1号墳出土土器

62 53

64 54

65 55

63 56

68 57

66 58

79 59

80 60

1号墳出土土器

81 61

83 62

87 63

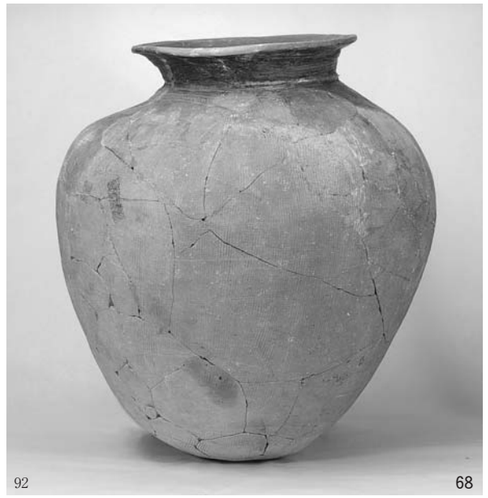
88 64

89 65

90 66

1号墳出土土器

91 67


92 68

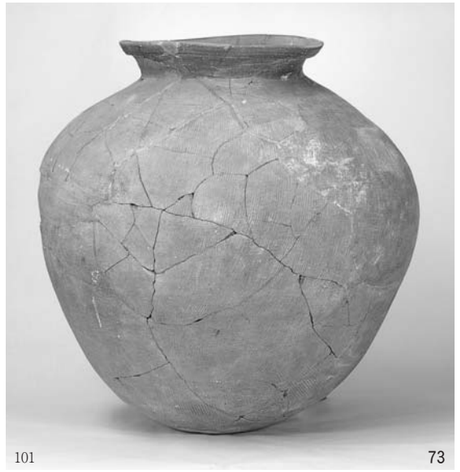
98 69

99 70

100 71

102 72

1～3号墳出土土器


101 73

103 74

2－3 75

2－4 76

3－20 77

報告書抄録

ふりがな	くさばこふんぐん に		
書名	草場古墳群 2		
副書名	第2次調査の報告		
巻次	2		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1104		
編著者名	松村道博		
編集機関	福岡市教育委員会		
発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	20100323		
作成機関ID			
郵便番号	810－8621	電話番号	092－711－4667
住所	福岡県福岡市中央区天神1-8-1		

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	東経 （世界測地系）	北緯 	調査期間	調査面積	調査原因
草場古墳群	福岡市西区 下山門字草場	40135	0510	333433	1301748	19740726 ～ 19741001	古墳4基	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
草場古墳群	古墳	古墳	方墳1・円墳3 横穴式石室4 石棺1 墳丘祭祀3	須恵器・土師器・鉄器・玉類	1号墳は方墳と考えられ、墳丘の墳裾に列石が廻り、羨道の両側に墳丘祭祀がある。

草場古墳群2

―第2次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1104集

2010年（平成22年）3月23日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷　国崎美峰堂
〒812-0053
福岡市東区箱崎1丁目20-5
TEL 092-641-8822